

# 関山

かんざん

第15号

関山

中尊寺〈寺報〉第十五号

平成二十一年(二〇〇九)二月



寺報 中尊寺



# NHK特別展「～平泉～」開催 (記事は30ページ)

## 時報ぐらびあ



仙台会場 (11月14日～12月21日)



喜多流能楽師 佐々木多門師・「道成寺」披露 (6月15日)  
初夏の白山神社能舞台にて (記事は27ページ)



福岡会場 (1月16日～2月22日)



能「白田村」 佐々木 宗生 師



狂言「末広がり」 野村万作 師



堂々と狂言を演じる子供たち (春・秋の藤原祭り)



文部科学大臣政務次官 浮島とも子氏来山  
(8月26日)



遠藤公男氏による指導で、境内に宮古式  
巢箱を設置 (11月11日)

深川富岡八幡例大祭水掛神輿渡御 (記事は46ページ)



平泉水掛神輿特別参加

## 現在其前

——仏様はその前にいらっしやる——

貫首 山田俊和

中尊寺には、陸奥の国、平泉の栄枯盛衰をあますところなくご覧になってこられた、丈六の阿弥陀さまがおわします。少々面長で、慈愛に満ち、堂々とした御尊容です。現在は讚衡蔵に奉安されていますが、このたび中尊寺本堂に五十二年ぶりに還座げんざされました。この還座を記念して、御宝前で百万遍念仏修行を発願し、平成二十年七月十七日より一年間の予定で修行致しております。この丈六の阿弥陀如来像は、像高二六七・九センチメートル、木造漆箔。足を結跏趺坐けっかふざにくみ、手は弥陀定印を結び、二重の円光背の尊容です。

本来は、山麓の光勝院に在り、その後、金色堂傍の闕伽堂あかの本尊として奉られてきました。

明治四十二年、現本堂建立の時に中尊寺本尊として奉安されましたが、昭和三十年に讚衡蔵（宝物館）が竣工成りまして、そこに奉安されて今日に至りました。

平成二十年は中尊寺にとって地震災害と世界遺産登録延期という二つの負の事態に遭遇した年でし

た。特に「平泉の文化遺産を世界遺産へ」の合言葉のもとに、国、県、市、町と共に、平泉の歴史・文化等の見直し、遺跡や景観の保護、浄土思想の研究と、あらためて多くの分野で盛んなる活動が世界遺産登録を目指して続けられていることは、新しい平泉を作り出す力になるでしょう。

さて、その主柱となるのは、藤原清衡公によって『中尊寺建立供養願文』に示された中尊寺創建の志です。そこには「拔苦与楽・普皆平等」とありますが、権力闘争に明け暮れ、戦乱の真只中にある濁世じよよを、仏のおわす浄土にと願われたことが書かれています。

その根本には、法華経の教えがあります。法華経には、「この世に生まれる人は、皆仏性を持っており、いつか必ず仏に成る」と説かれています。清衡公は、法華経を受持・読誦・解説・書写することによって、この世を浄仏国土にし、やがては弥陀の極楽浄土に往生することを念願しました。

法華経には、「説の如く修行すれば命終の時には、阿弥陀仏の蓮華の宝座に生ずる」とあり、阿弥陀経には、「阿弥陀仏の説くところを聞き、名号を一心に唱えれば、命終の時には阿弥陀仏は聖衆と共に現れ導いてくれる」とあります。即ち「阿弥陀仏 現在其前」です。

私達は、思い通りにならない四苦八苦の人生を、自然に抱かれ、他人の協力をいただいで生きていきます。生きるということは、自然を生かし、他人を生かすためともいえます。

中尊寺は、丈六阿弥陀如来像の本堂還座と百万遍念仏を遂行することにより、創建の意を伝え、この混迷する世にあって、人々の安心の燈ともになりたいと思っています。

阿彌陀佛  
現在其前

平泉中尊寺聖者後和  
清衡公  
孝文

## 平泉文化のめざすもの

多田孝文

### ◆はじめに

中尊寺のある関山と周辺一体の風光明媚な景観に接する時には、中インド摩揭陀国マカダの首都ラジギルを思い出す。釈尊が法華経を説かれた靈鷲山りやうじゆざんのある聖地である。

藤原清衡公は、まだまだ国内政治のめまぐるしい変転の時代に、なぜ仏の掌うてなのようなおだやかな地域を選んだのであろうか。時の為政者として自国を他から護る、さらに他を攻めるといふ発想があるならば、奥六郡のどこか要害の地に堅固な城を築くはずである。ところが『吾妻鏡』の記録や「中尊寺供養願文」の陳べるところは、まったく異質の都市構想になっている。それは、奥州全土に仏塔を建立し、中央に釈迦・多宝二仏をはじめ諸仏・菩薩を安置し、金銀泥一切経の写経を奉行

するなど、他に類例を見ない平泉仏教のはじまりである。

この構想から見えるものは、清衡公自身の数奇な生い立ちと度重なる戦乱の悲惨な結果、言い尽くせないほどの悲哀の極みからの最善の解決の道であったのである。清衡公一人では、どうにも消滅し得ないこの苦悩の世界を、全奥州いやこの地上に縁をもつすべての者、山川草木や水鳥樹林にいたるまでの一々の存在が、素直にその徳性をもって、この身土を浄め、仏土たらしめようとの心のさけびである。この構想は、法華経一乗の精神を根幹としたもので、すべてのものとともに、その実践行に精進しようとの宣言でもある。この法華一乗の精神による藤原氏の治国構想は、インドにおけるアシヨカ王の事蹟を思い起こさせる。

### ◆アシヨカ王の法勅

釈迦の滅後、BC3世紀頃にあらわれたアシヨカ王は、幼少より性格が狂暴で、父王の死後に多くの兄弟を殺して即位したと伝えられている。と

ころが、後にカリンガ地方を征服した時、その戦禍の余りに悲惨な結果を見て、性一変、深く仏法を信奉するようになった。すなわち発令して国中に八万四千の寺塔を建て、岩壁や石柱に法勅を刻して、仏教による治国の大理想を民衆に知らしめた。さらに都に長老を召集して、仏滅後第三回目の結集（けっじゅう）の編纂（へんさん）を行い、全国に伝導僧を派遣して仏教を宣布したのである。このように古代インドにおいて仏法による国家建設の偉業を果たしたアシヨカ王の事蹟はたいへん有名である。

#### ◆仏の教え

仏教とは、仏陀（釈迦）によって説かれた教えである。釈迦は、いまからおよそ二千五百年ほど前、北インドに出現した。当時のインドは戦乱が続き、世相も人心も乱れ、歴史上最悪の時代であったといわれている。そこで釈迦は、ごく常識的な人生の送り方を提唱したのである。

釈迦の生涯をめぐっては、多くの伝説に彩られるが、その一つに生れるとすぐに、七歩あるき、

右手を挙げて「天上天下唯我独尊」と言われたとされている。この一文は、釈迦がこの世に出現した目的と教えが込められたものである。

その教えとは、私たち一人ひとりの尊い存在は、天にも地にも他と比べようがない唯一の存在であり、自分を調え救うものは、自分以外にはない、そのような人間の尊い聖なる生命の働きを自覚してほしいということである。

七歩とは、釈迦が一生涯、身を賭して苦悩する人々に対応し教化したことを示しているのである。また、この尊い一々の存在を自覚し、常識的

人生を実現するために、次のように論じている。「諸の悪を作す莫れ、衆の善を行じ奉まつれ、おの自が其の意を淨くせよ、是れ諸仏の教えなり」この一偈は、仏教の実践を示した根本的な教えである。

悪とは、自己中心的な言動をいうのである。すべてとともに生き、すべてのものに生かされている自分を忘れないことである。

善とは、すべてのために生きることである。そ

のためには、つねに、自己の心を調え浄めておくことが大事である。これが諸仏の教えである。

内容は、非常に簡単なものであり、誰でも承知している事であるが、継続的に実行することが難しいものである。

そこで釈迦は、このことを伝えるために、たくみな手立てを設け、智慧を振り、忍耐強く、慈悲心をもって、対機の説法を生涯を通じて完うしたのである。それらの教えは、八万四千の法門といわれ、あらゆる方向から、真の人生のあるべき相を説き示したものである。

日常生活の常識を具体的に論じたもの（阿含経）、「心と仏と衆生に差別なし（華嚴経）」「ただ衆生の心の中に住り（同前）」「すべてのものは真実を蔵んでいる（勝鬘経）」、「娑婆世界は菩薩の仏土なり（維摩経）」、「相對・差別のこだわりから離れるよう（般若経）」、「あるがまま平等で真実である（法華経）」などである。

そこでは、理想の世界にしながら三毒（よ、く、いかり、おろか）におかされ苦悩の闇に迷っている私た

ちに、釈迦が光明の慈手をさしのべているのである。

#### ◆五つのよりどころ

これらの教えを大別すれば、円教（ものの見方・理解の仕方についての教行）・密教（秘密の教行）・禪定（自己の心性を観察するための教行）・戒律（悪を破し、善を修する教行）・浄土教（善業の功徳によって莊嚴する教行）の五つである。

釈迦の主張は、仏（まこと）から見れば、人間や山川草木や水鳥樹林などの自然のいとなみは、そのまま仏（まこと）の世界のあり方であり、一仏世界のいとなみである、というものである。ただその中において人間だけが、自己中心のわがままな心運びにふけり、真実の世界を乱し、苦悩する原因を人間自身が造っているのである。であるから、前述した諸仏の教えのように、自己中心な言動から離れ、一人一人がその心を調え浄めよう、そのことが仏土に有るものの勤めであるというのである。

さて藤原三代のめざした世界の構想が前述の中

にすでにうかがえるのであるが、法華經を見れば、なお一層、めざしたものがはっきりしてくるのである。

#### ◆法華經く実相の世界く

多くの仏教經典の中で「法華經」ほど広く世に知られ読まれている經典は他にない。その要因のおもなものを挙げれば次のようである。

一は、「法華經」の中心テーマである「あらゆる存在を絶対的に包容する」という仏教の精神を平易に説き明かした点であろう。

二には、偉大な仏教者であり、經典の翻訳家であった鳩摩羅什(350～409頃)によって「法華經」が漢訳されたことである。彼の訳文は、文学性に富む流暢な名文であり、「法華經」を世に知らしめたのである。

三は、天台大師智顛(538～597)によって示された「法華觀」である。智顛は、「法華經」こそが仏教の結論であると総括し、中心的哲学を明

らかに示した。智顛の示した「法華觀」は、以後の仏教文化に計り知れない影響をおよぼしたことも忘れてはならない。

#### ◆法華經の世界

さて、「法華經」には、どのような世界観が説かれているのであろうか。方便品では、「仏の成就されたところは、もっともまれで重要なことであって理解しがたい真理である。ただ、仏と仏の性をもっていることを自覚しているものが、この真理の世界をきわめるのである」と述べている。その世界観とは諸法の実相のことで、「この世を構成する一一の存在は、それぞれすばらしい異なった徳性をもちながら、それらが互いに平等の縁で結ばれていて、一一の存在が、すべてのために照り、すべてとともに照らし合い、この世界を荷なっているのである」というものである。私たち一人一人が重要な存在であることを教えている。自己中心に偏ったものの見方、理解の仕方からは知り得ない世界である。

素直で柔らかい心で目の前の世界を見れば、それがそのまますべて真実のあり方にある、というのである。

また、寿命品では、「本来私たちは真実の世界にある真実の存在である。このことを自覚して心運んでほしい」と、釈迦の人間観を説いている。

#### ◆衆生のあり方

釈迦の悟られた世界観、人間観とはうらはらに、私たちは、平等の縁の世界にありながら、つねに自分だけにこだわって生活をしている。そこから生ずるものは、恐れ、いかり、ぐち、欲、ねたみ、くやみなどの憂いの源ばかりである。

釈迦の十大弟子の長老舍利弗でさえもこのような自己中心的な状態に陥ってしまった。譬喩品では、舍利弗がこの状態を告白している。「私はむかしより今日まで、ひねもす、よもすがら、つねに苦しんで自責の念にかられていました。釈迦の言われた通り修行したにもかかわらず、なぜ釈迦は私に仏としての証明を与えてくれないのである

うか。そして、他をねたみ、仏を疑がっていた。しかし方便品の説法を聞くにおよんで、自分自身が真実の仏子であり、真理の中の存在であることを自覚して疑いが晴れた。」このように、舍利弗は、いままでの自己中心的な生き方を反省したと述べている。

また、譬喩品では、自己にこだわる衆生のあり方について「三界(煩惱の世界)は、安きことなく、多くの苦しみや憂いが充満していて、大変おそろしい。こだわりの心のままではこの状態は息まない」と教えている。

#### ◆衆生世界と仏界

さらに、寿命品では、自己中心的なものの見方や生き方をしている私たちの世界について、釈迦が「すべての衆生を見るに、苦惱にうもれている」と述べている。

ところが、私たちが生き、苦を感じているこの同じ世界を、釈迦は「この土は安穩であって、天人がつねに充満している」と述べている。この世

界が仏土であると見ているのである。すなわち、私たちは、すばらしい世界にいなからそれに気づかないでいるのである。

#### ◆私たちがこの世に在る因縁

譬喩品では、「すでに、はるかむかし、私たちは仏のみもとにおいて、この上ない真実の生き方についての教育を受け導かれていたのである。その因縁によって、この世に生まれた」と説いている。私たちは、理由なくこの世界に生まれたわけではない。私たちは、理想的な世界を実現する使命をおびているのである。この世を仏土と感ずて、充実した真の人生を歩むことに目覚めよと説いている。

#### ◆法華經のめざすもの

「法華經」は、私たちに、真の人生を歩むための、ものの見方・理解の仕方、心の運び方（これを仏知見という）を教えることが目的となつてゐる。すなわち、方便品に示されている「仏知見」を体得

することをめざしているのである。これは、「六根が清浄になることよつて得ることができると」されてゐる。私たちは、目・舌・鼻・舌・身・意の器官を自分中心に、そしてわがままに用いてゐる。たとえば、ものを見て、自分に都合のよいものは、善とし、都合のわるいものは、悪とするように。そこから、いろいろな苦惱が生じているのである。しかし、先に述べたように、釈迦の示した世界観・人間観から見れば、この世の一一の存在は、すべてこの世を構成している重要な存在であり、無駄なものはないのである。よつて自分中心のもの見方は、道理・真理に合わないものである。私たちは六根清浄を得て、真理に合う生き方をするよう努力すべきであるといふのである。

#### ◆決意を持つこと

勸発品では、これらの心構えを実践することは、言うことは易しく、行うことは困難であると説かれてゐる。まとめれば、次の四つの心運びが重要

である。

- ① 仏に護られるよう生きる
- ② 功徳を積む努力をする
- ③ 真の人生を歩む
- ④ すべてのために生きる決意をする

以上のような四つの心運びを成し遂げることがすすめてゐる。私たちがこの心得えを行すれば、仏は次のように守護する、と誓つてゐる。

#### ◆守護されている

「法華經」のところに随つた行動は、自分の心とのたたかひである。しかし、神力品では、時と処を問わず、かならず仏が神通力をもつて私たちを守護すると述べられてゐる。陀羅尼品では、聖者から鬼までもが、私たちの心に魔のおこるすきを与えないよう守ると誓つてゐる。勸発品では、普賢菩薩が白象（清浄心の象徴）に乗つて身を現わし、私たちを守護して、安穩を与えることが示されてゐる。

怖れながら生きる私たちには、眼に見えないが、

かならず多くの守護者がいることを認識して、自信を持ち、積極的に生きるべきである。

#### ◆徳性のままで

「法華經」の実践法を説いた『観普賢菩薩行法經』には、以上のべたことを、六根懺悔の法としてまとめられている。懺悔（反省）の法によつて私たちの六根が清浄になり真の世界を観察しながら、真の人生をおくることが出来ると説いてゐる。一句一偈の教えを心にねりつけ、いきかせながら、日常の生活を送る。また、教えを念じながら、自分自身の誤りの有無をかえりみて反省をする。これをくり返し行じていく。これは、私たちが煩惱をもつたままで、そして父母からいただいた肉身のまま、菩薩の行を完成する法である。この行を行ずる者は、悪相、悪報を見ないで一瞬のあいだに清浄心を得ることが出来ると説いてゐる。さらに、これを行ずる者は、真の仏子であり、菩薩の戒を具足する者であり、敬うべき生き方をする者であるといふ。

「法華経」は、私たちに、「あるがままの相すがたをそのまま見」て、あるがままの自分の真の徳性をもって惜みなく、すべてのために照らすことをすすめている。人と人との間にあって苦と楽とを半ばに受けながら生きるのが人間である。当然、あやまちがあることを仏は認めたと上で、この法華の教えによる懺悔の法を示されたのである。自分のあり方が、他のあり方を一層意義あるものにするよう、照らし合いながら人生を送ること、これが「法華経」の教えである。

#### ◆天台の浄土思想

浄土とは、諸仏や諸菩薩の功德力によって荘厳された世界をいうのである。たとえば、弥勒の兜率浄土、薬師の淨瑠璃浄土、観音の補陀落浄土などがそれである。しかし、浄土といえば、平安の昔から阿弥陀仏の「西方極楽浄土」と理解するのが一般的である。そこで弥陀の本願をたのみ、また、弥陀を念じて、けがれたこの娑婆世界を離れ、はるか彼方の安楽の世界に往生しようという弥陀

信仰が盛んに行われるようになったのである。

ところが「浄土」という語は、原典の梵本（サンスクリット語）を漢訳した時に用いられたものである。「浄土」「浄仏国土」と漢訳された梵本の原語は、「仏土」という場所を示す名詞の場合と、土を清浄にする、荘厳する、という動詞の場合とがある。この名詞・動詞の二つの原語が、漢文では同じく「浄土」「浄仏国土」「仏土」と訳されたのである。これを理解する時は、「浄土」を仏国・仏土という名詞として捉えるか、「土を浄める」という動詞として捉えるかが問題となるのである。漢訳仏典をよりどころとして仏の本意に趣向した仏教者には、この「浄土」という語の捉え方によって、大きく二つの仏教観が生じたようである。

一つは、私たちのいる世界とは別に、諸仏や諸菩薩の浄土が十方にあり、特に西方極楽浄土への往生を願うという現実否定的な仏教観である。

いま一つは、私たちが諸もろの善行を積む時、同時に仏と一体となり、仏土を浄め、娑婆世界にいながらそこに理想世界を顕現しようという現実

肯定の仏教観である。これは、天台の法華一乗の思想によるものである。

藤原三代の治国構想は、後者の仏教観によったものと考えられる。このことは、奥州藤原氏の仏教文化を解明する上で注意すべき点である。すなわち、

浄土教の重要な経典である『観無量寿経』には、私たちの身近にあると言われる仏身・仏土を観ずる十六の方法が説かれている。その中で「仏は、法界を身として生きとし生けるものの心想の中に入られている」「であるから、すべてのものが、心に仏を想う時、この心がそのまま、仏の身土を具えていて、仏と一体である。その事を想いながら作す業は、すべて仏としての行いである。仏の本意にかなう生き方は、私たちの心想より生ず」と説かれている。

天台大師智顛は、「仏は、自在であり、私たちの心が浄ければ、それに随って直ちに相い応ずるのである」と解いている。

天台の仏教思想は、法華一乗の精神で貫かれて、

すべてのものは、平等の縁の世界にあって、自と他が互いに融通し合って、呼吸しているという「法界互具」の思想である。個々別々に存在していると考えがちな私たちも、実は融じ合った世界の一員なのである。そこでは、仏も同じ世界に住んでいるのである。この世界観に逆らえば、苦悩が生じ、順ずれば、誰でも真の道を成ずることが出来るのである。

#### ◆土を浄める業とは

ところで、「心が浄ければ」という教えにかなう業とは何であろうか。

諸経典には、多くの業が説かれているが、その中のいくつかを紹介しよう。

「自己中心的な心運びを慎めば、幸いあれ（スッタニパータ…釈迦の初期のことば）」、「心と仏と衆生世界の三つは差別がない（華嚴経）」、「理想の世界は、ただ、衆生の心想中に住んでいる（同前）」、「直心（すなおな心）、深心（功德をつんだ心）、菩提心（すべてのためにという心）、この三心をもって、修行者は土を浄

める（維摩經）、「相對・差別のこだわりから離れよう（般若經）」、「自己の徳性のままの業は、仏道を成じている（法華經方便品）」、「やわらかく、すなおな心は、眞実の世界が見える（寿命品）」、「受持（教えを心にねりつける）・読・誦（教えをよむ）・解説（理解し他のために説く）・書写（経を書き写すこと）、この五種の行の功徳は何の行よりも功徳が大きい（法師品）」、「敬いの心（不輕品）」、「慈悲の心（普門品・觀音經）」、「諸仏に護られる生活に精進すること、功徳を積むこと、正しい道を進むこと、すべてのものを救う心を発すること（勸發品）」、「六根を清浄につとめること（觀普賢經）」、「つねに懺悔すべきこと（同前）」これらは、功徳を積むためのものであり、仏土を浄める業である。

藤原氏の治国構想によれば、中尊寺は、これらの浄行を推進するための発信の基点であった。

#### ◆結び

奥州藤原氏が莊嚴な仏教施設を建設したのは、それらを誇らしげに示すことが主題ではなかった。

た。彼らは、法華一乘の思想をもって、仏土を浄めようと決意し、中央に釈迦を安置し、各地に寺社・仏塔を設け、全奥州を修行の道場として、それを実践したのである。それを発信する基点が奥州平泉なのである。

彼等の偉業は、全奥州をあげて、この地を浄めようと決意し、発信したことにある。この構想は、奥州のみならず全世界を仏法界たらしめようとする壮大なものである。藤原氏は、釈迦の教えの実践が無量劫なりとの決意をもって、土を浄める長い修行の旅に出発したのである。

そして、今もお、藤原氏は金色堂にあって、仏とともにこの敞しい行を継続している。

最近、世相の乱れいちじるしい折、奥州藤原文化が、話題に挙げたことは、私たちに對して、つとめて土を浄めよとの、氏からの音声と受けとめたい。

（ただこうぶん  
大正大学仏教学教授）

## 来世の浄土 現世の浄土 心の浄土

藤波 洋香

極楽浄土とは一体どのようなところなのだろうか。行ってみたことがないので確かなことはわからないが、「阿弥陀經」によれば阿弥陀如来を主とする極楽浄土は西方はるか彼方にあるという。

そこには清らかな水をたたえた池があって、池の底には金の砂が敷きつめられ、色とりどりの蓮の花が咲き誇っている。池のそばには七宝で飾られた楼閣があって、極楽全体は金、銀、るり、水晶をちりばめた垣根や並木にとり囲まれている。そして常に心地良い葉の音が流れ、香しい花びらが降りそそぐ。孔雀や鸚鵡や迦陵頻伽などの美しい鳥が優雅にさえずり、阿弥陀如来の発する光が昼夜の別なくこの国を覆い尽くしている。さらに極楽

浄土は光に満ちあふれた美しく香しい理想の生活環境を保障しているのみならず、そこには悲しみや憎しみや怒り、ねたみ、うらみというような精神的苦痛もなく、老いや病や死というような肉体的苦痛もないのである。その国の人々にはいろいろな苦しみがなく、ただいろいろの楽しみのみがあるという。ゆえに極楽と云うのである。このように「阿弥陀經」には極楽浄土の風景描写がこと細かに描かれているが、それはあくまで死後の浄土、来世の浄土なのである。

それに対して藤原清衡公をはじめとする藤原三代が作り上げた浄土は現世の浄土であった。中尊寺を建立するにあたって、清衡公がその意義と願いを述べた「中尊寺建立供養願文」には、官軍、賊軍の別なく戦禍にあって死んでいった人々はもとより、獣や鳥や魚に至るまで、故なく命を落とした霊がすべて極楽浄土に往生できるように願ひ、そしてまた辺境の地に住むものも皆平等に平和に暮らせる現世の浄土が実現するよう願って堂宇伽藍を建立する旨が記されている。そういう願ひの

もとに具現化された現世の極楽浄土は贅を尽した金色堂をはじめとする数々の堂塔であり、壮大な浄土庭園であった。しかし清衡公が真に願ったものは、生きとし生けるものがいみあうことなく傷つけあうことなく、心穏やかに心安らかに平和な暮らしを送ることができるとしての社会的実現だったにちがいない。

しかし一口に「心の安らぎ」とか「安心」とか言ってもこれがかたくなか難しい。たとえ極楽浄土のような（あくまでようなであって極楽そのものではない）快適な生活環境が整っていたとしても、そこに住む人々の心が常に穏やかで何の不満もなく安らかだとは限らないのである。人間は本来死にゆく生き物であるがゆえに老いからも病からも逃れることはできない。常に老いの不安を抱え、病と戦って生きてゆかなければならないのである。また「人間とは欲に手足をつけた生き物だ」と言った人がいたが、その貧欲さゆえにどんなに良好な環境にあっても不平不満はなくならず、日常の争い事や心配事の種は尽きることがない。人々のまわ

りには良縁のみならず、奇縁、悪縁、腐れ縁などさまざまな縁が網の目のように張りめぐらされていて、良縁に恵まれた時は物事がスムーズに運ぶが、そうでない時はどうあがいても身の不運を嘆くしかないという事になってしまふ。良い時は驕らず、悪い時は絶望せず、常に平常心を保つというのが仏教の目指す所ではあるが、なかなかそう簡単にはいかない。因果応報というが、人生においては原因と結果の相関関係があまり明確でないことがままある。世間では善人がひどい目にあい、悪人がのさばるといふようなことは別に珍しいことではない。良きにつけ悪しきにつけ、人はさまざまな外的な縁の影響を受けながら生きてゆかざるをえず、しかも時間と空間を越えて自分に働きかけてくる外的な縁のすべてを把握しコントロールすることができない以上、降ってわいたような災難や理不尽な苦しみというようなものをすべて避けることは難しい。それゆえにこの世を苦海（苦界）<sup>くかい</sup>といい娑婆世界<sup>しあは</sup>というのである。

娑婆とはサンスクリット語（古代インド語）でサ

ハ、すなわち耐え忍ぶという意味である。人間をはじめとしてこの世の生きとし生けるものはさまざまな重荷を背負いつつ、耐え難きを耐え、忍び難きを忍びながら生きてるのである。このことはそれぞれに自分の人生を振り返ってみれば納得できるはずである。時には「なぜ自分だけがこんな苦勞をしなければならぬのか」と思うこともあるだろうが決してそうではない。どの人にもどの家庭にもどの職場にも、外から見ただけではわからない苦勞があるということは二十〜三十年（いや三十五〜四十年か）も生きてみればわかることである。

ではこの娑婆世界と極楽浄土との関係はどうなっているのだろうか。「阿弥陀経」によれば「七日間、一心不乱に阿弥陀仏の名前を念ずれば、その人の命が終わろうとする時、阿弥陀如来が多<sup>おほ</sup>くのお伴を連れてその人の前に現われて極楽浄土へと導くであろう」と極楽往生の様子が説かれている。「阿弥陀経」に書かれているのは来世の浄

土であるが、清衡公が追い求めた浄土は現世の浄土であって、そのあり場所はわれわれ自身の心の中以外にはない。人間は老いや病や死の不安や苦しみから逃れることはできず、日常的には愛するものと別れる苦しみや、憎たらしい奴と出会う苦しみや、欲しいものが手に入らないというような苦しみにさらされ続けている。自分の心も思いどおりにコントロールできないければ、まわりも思いどおりにはならないという、まさにストレスもここに極まれている状態である。しかし考えてみれば、この世は「阿弥陀経」に描かれているような極楽浄土ではなく、耐え忍ぶべきことを求められている娑婆世界なのであるからこのストレスも当然といえば当然ということになる。とすればこの娑婆世界を極楽浄土にする方法などあるのだろうか。答えはただひとつ、身もふたもない言い方をすれば、気の持ちよう、心の持ち方ひとつにかかっているということになる。

最近読んだ本の中で最も印象に残っているのは「生きていくのは当り前じゃあない。明日が来る

のは当り前じゃあない。失う前に気付いてほしい今ある幸せ」という一節だった。著者は五十代の女性のエッセイストでガン患者。彼女は、もうあまり先の計画は立てられなくなってしまうが、それだからこそ一日一日をゆるやかに確実に生きてゆけたらいいなあと思うという。平々凡々と暮らせることの有難さ、今ここに生きていることの幸せを実感しているという。病と死という人生最大の苦しみを背負っている人のエッセイにしては驚くほど悲愴感がなく、軽やかなユーモアあふれる一冊だった。もちろん彼女が常に明るく幸せな気分ではいるとは思わないが、不平不満の多い生活



を送り、自分の抱えているストレスをまわりにもまき散らしながら生きている私としては久しぶりに慚愧に堪えない思いにさせられた瞬間だった。誰にも明日のことはわからない。「我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず」という状態を認識した時にこそ「今ここにある幸せ」が実感できるのである。病気になってみてはじめて他人の痛みがわかるということもあるし健康の有難さがわかるということもある。自分が老いてみてはじめてその苦しみや哀しみがわかるということもある。人間には想像力があるのだから何も自分が病気にならなくても年をとらなくてもその苦しみはわかるだろうという考え方もあるだろうが、やはり本当の所は経験してみないとわからないのではあるまいか。そうだとすれば娑婆世界の苦しみに耐えた（あるいは耐えている）人ほど仏様の慈悲の境地に近いということになる。「寒さに凍えた人ほど太陽の有難さを知っている。飢えに泣いた人ほど米の有難さを知っている。人生の苦悩を味わった人ほど命の尊さを知っている。」という

言葉がある。私は若い時、苦を苦にしない生き方がスマートな生き方だと思っていたが、年を重ねるにつれて苦をきちんと苦しむことが大事なのではないかと考えるようになった。人生その時々苦しむべきことをしっかりと苦しむことが極楽へとつながるのではあるまいか。いやそうではなく、苦しみの中にこそ楽があり、苦しみがなければ楽はないということなのかもしれない。

仏教に「娑婆即寂光」という言葉がある。寂光とは静かで穏やかで光に満ちあふれた世界、即ち極楽浄土をいう。迷いの中に悟りがあり、苦の中に楽があり、一見相反するように見える二者は実は表裏一体、混然一体として存在するものなのである。そしてそれらはすべてわれわれひとりひとりの心の中にあるのである。地獄も極楽も心の中にある。人と争い相手を打ちのめすことにのみ心を傾けている時、人は修羅になる。貪りと嫉妬心にとらわれている時は餓鬼となり、向上心を忘れて怠惰に流れた時は畜生となる。そして他者の

痛みを自分の痛みとし、他者の喜びを自分の喜びと感じられる時、人はほとけとなって極楽の住人となるのである。人の心は常に揺れ動く。自分でも驚くほど冷酷になれる時であれば、欲に目がくらんで冷静な判断ができない時もある。世間体やメンツにこだわって他人に寛大になれない時もあるれば、他人の苦しみや悲しみに寄り添って涙を流すこともある。すべてがひとりひとりの心の中にある真実の世界なのだ。だから煎じ詰めれば極楽浄土は心の中にあるのである。死後の極楽浄土はその存在を確かめようもなく、ただその存在を信じるしかない。しかし現世の極楽浄土は確実に自分の心の中にあつてその存在を確かめようと思えば確かめることができるのである。

（ふじなみようこう 黒石寺住職）

・挿絵 西村公朝師 新潮社より掲載許可済

## 世界に開かれた平泉文化の創造

千葉 泉 弘

波乱に満ちた二〇〇八年が夕闇の彼方に消え、二〇〇九年の夜明けを迎えました。昨年は、平泉のユネスコの世界遺産リスト登録が三年延期され、大変残念な思いをしました。今度こそ世界遺産リスト登録を目指して文化庁や岩手県庁の責任者と地元が一丸となって申請書の準備に取りかかることを期待します。今度がラストチャンスなので、その責任は重大です。しかし、世界遺産リストに登録されることが最終目的ではなく、世界遺産として認められた後に、平泉がどのようにその栄光を輝かし続けるかということが問題です。

私は、平泉、奥州文化の将来像は「浄土思想を基調とする文化的景観」という文脈のなかに秘められていると思います。すなわち、過去の遺産としての価値だけでなく、現在から未来へ時系的に

継続する価値観とビジョン、一つの国や文化圏を超えて世界に広がる普遍性、そして、平和や環境問題と云った世界が現在直面する重大課題の解決に向けた指針の発信地と云った多様な要素を持った将来像が浮かび上がります。

蝦夷といわれた安倍氏の血を引く清衡が、長い争乱を制して、平泉に奥州の都を置く過程で、多くの同族や中央からの遠征軍の血が流されたわけで、清衡は、身内をも犠牲にした慚愧の念に苛まれたのではないのでしょうか。敵味方の隔てなく、生きとし生けるものの濟度往生を説く浄土思想は、おそらく唯一の救いであったことでしょう。この浄土思想を、普遍的な価値として現代に活かしているのが共生の思想ではないかと思えます。共生の思想は、紀元前一二〇〇年頃に既にインドのレグ・ベータと云う世界最古の文献に存在していました。この思想が、仏教に影響を与え、現代ではマハトマ・ガンジーの非暴力平和主義につながり、他方中国を経由して浄土思想として朝鮮半島を通じて日本で開花しました。朝鮮半島では、

「相生」と云います。平泉文化、浄土思想の普遍性は、平和の基礎概念である共生の思想として世界に発信できるのではないのでしょうか。また共生は、人間対人間、国対国、民族対民族といった人間社会の共生だけでなく、動植物や自然との共生、地球を超えた宇宙との共生も含みます。さらに、歴史、伝統文化と現代の共生、すなわち時系的継続性にもつながります。共生は文化や信仰の多様性を理解するだけでなく、相互に尊重する寛容さを必要とします。

浄土思想の中に生きる共生の祈りは、「平和の砦を全ての人に心の中に築く」というユネスコ精神に通じます。この内面的平和志向を、世界大戦直後から現在まで世界的に具現化しようと努めてきたのが国際理解教育です。それはさらに「平和の文化」という広い概念に発展しました。ユネスコ教育国際委員会は、二十一世紀の教育の本質は、下記の四本の柱からなる指摘しています。

知ることを学ぶ、  
行動することを学ぶ、

ともに生きることを学ぶ、

人間として生きることを学ぶ、です

現在世界中で、「共に生きる」ことの重要性が大きく取り上げられています。イラクで、アフガンスタンで、またアフリカでも多くの人が「共に生きる」価値観を涵養することが緊急に求められています。浄土思想の核をなす共生観はまさにこの要請に応える精神的価値観ではないでしょうか。一方、国内においても、最近多くの人命が犯罪によって失われています。浄土思想は、命の大切さを、そして人間として生きることの大切さをもっと強力に発信できると思います。

では平泉は、命の大切さや共生の重要性をどのように日本の社会に、さらに世界に伝えたらよいのでしょうか。これは平泉の地域社会が真剣に考えなければならぬ早急な課題です。同時に、未来を担う青年や子供達に教育を通して平泉の持つ価値を伝え、世界に羽ばたくように指導することが大事です。

世界では、貧困と格差が平和実現の大きな障害



日本庭園ごしに見たユネスコ本部（パリ）

となっています。未だに七億七千四百万人の読み書きできない成人がおり、そのうち六十四パーセントが女性です。また、七千二百万人の学齢期の児童が学校に通っていません。これらの子供たちはやがて大人の非識字者になります。生きとし生ける全ての人が教育を受けられる時代が来ないかぎり、格差も貧困も解消されません。

一九九二年のヨハネスブルグ環境サミット以来、持続可能な開発と循環的環境保全の重要性が叫ばれ、温暖化対策が国際会議で論じられていますが、先進国と発展途上国間の溝は埋まっています。

自然と調和する平泉文化は、まさにこの分野の世界的なモデルといえます。誇りと自信を持って日本中に、また全世界に自然との共生について発信できると思います。若い世代の教育を通し、また、国内・海外の文化との交流を通し、平和と共生への祈りを伝える世界に開かれた平泉になることを祈ります。

（ちばあきひろ 元ユネスコ本部事業調整局長  
国際基督教大学顧問・一関市出身）

## 「直心是道場」

じきしんこれどうじょう

佐々木 多門

昭和五十七年に、中尊寺白山神社能舞台で父が「道成寺」を披いてから二十六年。平成二十年六月十五日に私も、中尊寺と白山神社のお許しを得て、同じ舞台で披かせていただきました。

能「道成寺」は、舞台の中心に、大きな鐘の作り物を吊り上げ、三十余名の人が舞台上上がるといふ、実に大がかりな曲で、念入りの準備が必要のため、地方の野外舞台において上演されることは、滅多にありません。演者各役それぞれに、気の抜けない秘事口伝の心得や技があり、充実した芸力、気力が求められる故に、〈披キ〉という初演の時には特に、能修業の大事な節目の舞台とされてきました。

ほとんどの大先輩方が、東京にある喜多流の本舞台で道成寺を披かれています。祖父の縁とはい

え、この平泉での披演を流儀内で異議なく承認してくださったことは、たいへん有り難く思いつつ、中尊寺の舞台が、喜多流にとって伝統ある大事なところであると、あらためて示してくださいましたのだとも感じました。私も、これまで初シテ〈主役〉のときや「猩々乱」等の大曲をこの舞台で舞わせていただきました。『道成寺も平泉でやりたい』と、自然にあこがれていたのですが、実際に決定したときには身が引き締まりました。

「能は舞台の上だけではなく、演能を可能にするのも能である。」とは祖父の言とありますが、演能前日に〈岩手宮城内陸地震〉が起きたこともあり、深く思い知らされました。

ひとつの舞台が、いかに多くの支えによって成されているのかを知る。それこそ道成寺を舞う大きな意義であると、舞台を終えた先人方が、皆云われたことです。演能後、私も支えられて舞わさせていただいたという思いを強く持ちました。殊に私は父の道成寺のときにも携わってくださいました方など、能の伝統ある地元の助けがなければ、到

底、このように会を催すことは出来ませんでした。ご多忙の中、長い期間にわたって準備・作業をしてくださった諸方面の方々。さらに自分が知らない所でお世話やご支援くださった方も大勢いらっしゃるのだと思います。

力を尽くしてくださった演者の諸先生方も、緊張感ある見所にしてくださったお客さまも、地震による交通の混乱のなか、大変なご苦労をしてお出でになってくださいました。道中にて送ってくださった励ましのメールは、今も大切に取っています。

先人や師、仲間から後輩にいたるまで、道成寺の演能において、たくさんの教えやお言葉をいただきました。

道成寺の御祝いに、中尊寺貫首さまより「直心是道場」の法語を色紙にして頂戴いたしました。強く胸に響いたこの言葉を座右の銘として、これからも精進してゆく所存です。

私の師の塩津哲生先生には、鐘入りの際に鐘を落とす、最も責任ある後見のお役を、望外のこと

に先生より「自分がやろうか」とおっしゃってください、お願いすることができました。

終わってみれば、今後の課題ばかりが出たような舞台でしたが、何とか勤め上げられましたのも、ひとえに師よりの稽古のお陰でありました。道成寺の稽古は詞では表現できかねるのですが、「伝」と「承」の心のありようを教わった気がいたします。

能は、観客を相手とする劇でもありますが、もとは寺社の祭礼や法会の場合から生まれた芸能ですから、神仏に手向ける心を持って舞うことも、とても大切なことです。

塩津先生より、心身の内面からの強さ、気の充実のことを繰り返し稽古でご注意いただきましたが、それはつまり、神仏に対して自分の心の中を隠さずに披露してみせること、とも言えるのではないかと私は思います。

その意味でも、中尊寺の御神事能の伝承に携わることには、能の根本に立ち帰ることができる、私にとって非常に有難く貴重な場となっています。

稽古だけでなく、装束・道具の出し入れ等の支度。当日の楽屋の中は装束の着付けなど、猫の手も借りたほどの忙しさですが、無事に終わったあと清々しさは御神事能ならではの幸せです。

中尊寺の御神事能の舞台を担ってゆく人を育てて守り伝えること。これが歴史ある中尊寺白山神社能舞台を真に生かしてゆくことでしょう。この能舞台からたくさんの恵みをいただいている者として、学校に赴いて舞を見せたり、舞台で学生能を催行したりしてご指導をいただきながら、次につながることをしてゆきたいと思っています。

能舞台は、能狂言を演じ舞うための舞台です。ですが、舞台の建物だけ立派に残っても意味がないのです。多くの支えによって演じられる能が、その地の人々の力で生きた姿としてこの地にあるのですから、これこそ、平泉の大いなる遺産のかたちのひとつであると思います。

最後に、もう一度振り返って考える機会を与えてくださった寺報「関山」編集部に感謝申し上げます。

(喜多流能楽師)



特別展

『平泉くみちのくの浄土』

破石 澄 元

(はじめに)

特別展『平泉くみちのくの浄土』は、世界遺産登録を記念する行事として企画されたものでありましたが、ご存知のとおり世界遺産については登録延期ということになり、にわかに「世界遺産登録をめざして」という趣旨に変えて、現在下記の予定で開催されています。ここでは、開催に至るまでの大まかな経緯と、開催の概要を報告いたします。

仙台市博物館

平成二十年十一月十四日～十二月二十一日

福岡市博物館

平成二十一年一月十六日～二月二十二日

世田谷美術館

平成二十一年三月十四日～四月十九日

しいのではないかと思われました。なによりも、引き受けてくれる博物館があるかどうかさえ分からない状況で、具体化の目途がまったく立ちませんでした。まして、全国の巡回展というかたちでは、中尊寺やその周辺で事務局を構成しても実行できるものでもありません。平成五年にNHK大河ドラマ「炎立つ」にあわせて、「中尊寺黄金秘宝展」を展開しました。その時も巡回展で仙台・福岡・東京・盛岡で開催したことがあり、各館とも大勢の入館者でにぎわい、成功をおさめたことがありました。その際に事務局を担当していただいた松浦潔氏が、NHK仙台放送局に事業担当部長として戻っていましたので、十二月のあわたたしい時期ではありましたが相談を持ちかけました。

翌一月からは、平泉郷土館の大矢邦宜館長を中心に、準備会が精力的に開催され、岩手県・平泉町・奥州市・一関市・中尊寺・毛越寺と順次協力を要請し、承諾をいただくことができました。その間、展覧会の基本的な企画が検討され、また開催館の折衝が行われました。その結果主催は、岩手県、平泉町、奥州市、一関市、中尊寺、毛越寺、NHK仙台放送局、NHK東北プランニング(現NHKプラナ



会場入口に展示された金色堂の模型

(経緯)

世界遺産登録を記念した展覧会実施の検討を始めたのは、平成十七年の秋でした。平成二十年の世界遺産登録を信じて疑わなかったところで、その時期に合わせるには時間的な余裕がありませんでした。展覧会の構成や出展資料の検討、それに続いての出展交渉などを考えると、実現は難

ツト東北)で構成し、準備を進めていくこと、さらに上記の博物館・美術館で開催することが確認されました。五月には第一回企画検討委員会(委員長 有賀祥隆東北大学名誉教授)が開催され、以後随時この委員会が開催されました。九月には「平泉く浄土思想を基調とする文化的景観」世界遺産推薦の政府決定がなされ企画委員会に弾みがついたところでした。十一月には中尊寺で金色堂西北壇の十一体の仏像をはじめ、かつてない多くの文化財の出展を決定したところでもあります。

十九年になって、展覧会の名称を、世界遺産登録記念特別展「世界遺産 平泉くみちのくの浄土」とすることとし、各文化財所蔵者の方々に出展交渉を行い、ご理解ご協力を得ることができました。また、展示の基本計画もまとまってきました。八月にはイコモス(国際遺跡物記念会議)による現地調査がおこなわれました。

二十年。展覧会の準備も順調に進んでおりましたが、五月にイコモスの「登録延期」勧告がだされ、さらに七月にはユネスコ世界遺産委員会で登録延期の決定がなされました。日本としては三年後(二〇一一)の登録をめざすこと

が方針として確認され、関係者一同胸をなでおろした次第です。



黒石寺の持国天・広目天

（開催趣旨）  
先にも述べましたように、元々世界遺産登録記念の展覧会を目指したものでありましたが、平成二十年七月のユネスコ世界遺産委員会で登録延期が決定し、三年後（二〇一一年）の登録をめざすことが確認されましたので、開催趣旨も次のように変更することになりました。

二〇一一年の世界遺産登録をめざしている「平泉」は、十一世紀末から十二世紀にかけて奥州藤原氏によって築き上げられた「みちのくの都」です。なかでも中尊寺金色堂や毛越寺庭園は、奥州藤原氏が理想とした平和で平等な世界の象徴とされています。  
本展では、中尊寺金色堂内「国宝金色堂西北壇壇上仏十一体」をはじめ、「平泉の文化遺産」を構成する中尊寺や毛越寺、達谷窟、柳之御所遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡などの名宝や出土資料、みちのくを代表する仏像を加え、「平泉の文化遺産」の魅力を紹介します。



平泉町内からの出土品

（展示構成）

展示の構成については「浄土思想を基調とした文化的景観」というコンセプトを強く意識せざるを得ませんが、実際の展示となるとやはり視覚に訴えるわけですから、有形の彫刻や美術工芸品あるいは発掘の出土品が中心になります。また、仏像については、昨今各地の博物館でいろいろな展示方法が試みられているようですが、本展では彫刻の展示というより、尊像の安置ということに重きを置いて取り扱うことに留意しました。

プロローグ「浄土空間・平泉」

平泉全体が自然美の浄土空間であることを紹介しています。曼陀羅の世界の浄土、つまり当麻曼荼羅などの阿弥陀仏の浄土を表したものや、弥勒菩薩の浄土を表した兜率天曼荼羅、あるいはアンコールワットなどのパネルをつかい、經典に基づいて描かれた「浄土」を展示しています。これらは視覚的には幾何学的に描かれています。それに対し平泉の景観は、毛越寺の浄土庭園に代表されるように、自然美を取り入れた、きわめて日本的な浄土を構成しています。

## 第一章「みちのくの古代・みちのくの祈り」

平泉以前の東北の信仰を紹介することになりました。会津・勝常寺の本尊、国宝薬師如来三尊像は平安時代初期の造像で、さすがに圧倒的な存在感を示しています。また、一関・永泉寺の聖観音像はすらりとしたプロポーシオンに目をひかれます。仙台・十八夜観音堂の菩薩立像は今回初めて紹介されているものですが、奈良時代後期と考えられ、また姿かたちも美しく整っており、拝む人を引き付けます。ここでは東北地方の豊かで多様な祈りを紹介しています。

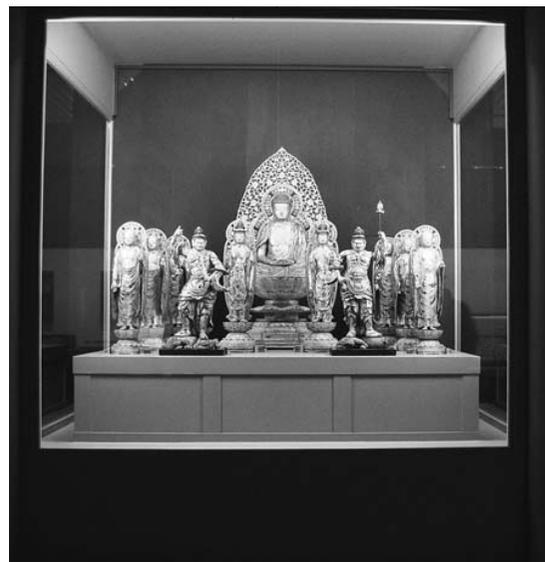
## 第二章「仏都平泉」

「みちのくの中央・朝日差し夕日輝く」  
平泉町内の遺跡から発掘された出土品が中心です。はじめに前九年合戦絵詞・後三年合戦絵巻で平泉建設直前の時代背景を紹介し、つづいて出土品によって、当時の暮らしや、祭祀の様子などの一端を窺うことができます。さらに中尊寺・毛越寺・西光寺、そして骨寺・長者ヶ原廃寺・白鳥遺跡など、世界遺産登録にむけた九つの構成資産が紹介されています。

同じですが、間近で拝むことができるようになっていきます。国宝の八角須弥壇、文殊五尊像、金銀字及び金字経などなど……。中尊寺で所蔵する文化財の多くが出展されています。金色堂の仏像は近年調査が行われ、その成果も報告されています。また高野山に移蔵した金銀字経についても、最新の調査結果が報告されています。工芸や写経に見られるように、手抜きのない精緻な技法を尽くした様子から藤原氏御三代の信仰の深さを感じ取ることができます。

## 第四章「祈りとまつり」

ここでは、中尊寺や毛越寺で行われている祈禱やそれに付随する芸能を紹介しています。出展資料の中に指定文化財そのものは、他の章に比べて少ないのですが、たとえば毛越寺の「延年舞」や、衣川の「川西大念仏剣舞」は、それ自体が重要無形文化財であります。平泉では藤原氏の有形文化遺産を護り伝えていただけでなく、中世から継承されてきた『祈り』も伝えられています。ここでは正月の祈禱と春の神事を中心に、付随する芸能とともに紹介していきます、これらの伝統的な行事は「抜苦与楽、普皆平等」と



金色堂西北壇 壇上諸仏

## 第三章「輝きの浄土」中尊寺の至宝」

中尊寺所蔵文化財の全容を紹介しているようなものです。金色堂の秀衡壇といわれる西北壇の壇上諸仏十一体が揃って安置されています。十一体の仏像の配置は金色堂と

いう清衡公の願文の主旨に沿うものと考えています。



毛越寺の延年資料

会場ではさらに「浄土平泉」を解説するものと、法会および芸能から「祈りとまつり」を解説する映像が流されており、こちらも皆様に好評をいただいているようです。私も度々博物館に行ってみましたが、とくに金色堂西北壇の尊像を安置したところなどでは、自然に手を合わせている方々も目に付きました。そのような姿を見ていると、出展の目的がやや達せられたような、安堵感のようなものを持つことができました。

仙台展が盛況のうちに終了できましたことは関係者の一人として大変うれしく、本展開催にあたって、ご尽力・ご協力いただいた方々および関係機関の皆様に、重ねて御礼申し上げます。  
(仏文研主任)



中尊寺の工芸品

#### 「福岡展」開会式素描

開会式では、西憲一郎館長・石田研一NHK福岡放送局長に続いて挨拶の機会をいただいた。

「九州と陸奥は、遠くていかに近いか」、金色堂の内陣荘厳に光彩をとどめる夜光貝、宋版一切経にしても博多の津を經由し、此処が玄関であったことに触れてから、玄界灘の大島（宗像市）には、安倍宗任の墓と伝える所があつて、陸奥衣川の安倍氏の縁が今に伝わっている。村の人は安倍姓が多く、中学生がそうした縁りを大事にしてくれて、修学旅行に（奥州市）衣川、平泉を訪ねてきてくれた話をした。

また、この福岡県の瀬高町（みやま市）には古くから幸若舞が伝わっていて、判官物といわれる曲に「泉が城」「高館」といった曲がある。義経最期の地・平泉を口承し立派に伝えてこられたことなど、時代を超えた御縁の地であることを申し上げた。開催十日目には、福岡県も雪浄土になったとの報である。

(佐々木邦世)

#### 開幕 讃衡蔵テーマ展

### 「平泉」伝承の諸仏

平成二十年十月二十八日（火）から二十一年四月二十四日（金）までの会期で、讃衡蔵テーマ展『「平泉」伝承の諸仏』が開催されている。



木造薬師如来坐像 茨城 西光寺蔵

奥州藤原氏初代清衡公は戦乱で命を失った生きとし生ける

るものの霊を浄土に導くため平泉に中尊寺を建立し、さらには陸奥・出羽国内の村ごとに伽藍を建立して仏教にもとづく治政をおこなったと伝えられている。二代基衡公、三代秀衡公も深く仏教に帰依して造寺造仏の作善をおこなっている。今なお各地に藤原氏ゆかりの寺院や仏像が伝えられている。本展では各地に長く伝えられ信仰されてきた藤原氏ゆかりの諸仏をお招きし、また写真パネル等で紹介しながら、仏教に基づく藤原氏の平和理念を讃仰することをテーマに企画された。

なかでも、茨城県常陸太田市西光寺の木造薬師如来坐像は藤原清衡公の娘が嫁した佐竹氏建立といわれる西光寺の本尊で、その穏やかな作風は平安時代後期、関東における定朝様式の典型を示している。像高一四四・五センチメートル、台座・光背を合わせると約三メートルに及ぶ尊容であるが、幾多の火災で当初の伽藍が失われる中、飛天光背を含めて半丈六の尊体を守りぬかれてきたことに、この御像に対する地元の方々の並々ならぬ信仰心がかかわれる。現在、当地でも年に二度しか御開帳されない貴重な御像である。

また、宮城県気仙沼市観音寺の本尊、木造阿弥陀如来坐像もまた均整のとれた平安時代後期の穏和な御像である。観音寺の故地は熊野信仰の霊峰室根山（岩手県一関市室根町）の南麓にあったといわれ、この御像は奥州藤原氏の室根山に対する信仰を今に伝えている。また観音寺には源義経の伝説ものこされるなど、平泉とゆかりの深い土地柄である。

岩手県奥州市黒石寺の木造日光・月光菩薩立像は奥州藤原氏二代基衡公の寄進と伝えられる御像で、やはり平安時代後期に遡る優美な和様菩薩像である。黒石寺には本尊の薬師如来坐像をはじめ九世紀から十二世紀にかけての特徴的な御像が伝えられ、東北地方の彫刻史上欠くことのない古利である。

このほか本展では中尊寺一山支院所蔵の諸仏も多数出展されている。特に常任院の釈迦如来及び両脇侍坐像、金色院の大日如来坐像は平成二十年の調査によって、奥州藤原氏の時代に遡ることが確認された御像で、一般に公開されるのは本展が初めてとなる。

中尊寺では本展の開催に併せて記念図録を発行した。図

録では青山学院大学教授浅井和春氏が新知見を加えながら「平泉」にまつわる彫刻史を概説し、図版には本展に出陳されない御像も網羅し、全国各地に伝承される平泉ゆかりの御像を紹介している。（五十八頁 研究／出版 参照）

本展は会期中一部展示替えを行いながら、四月二十四日まで開催されている。

出展リスト

- 光背残欠
  - ◎ 木造薬師如来坐像
  - ◎ 木造大日如来坐像
  - ◎ 木造大日如来坐像
  - ◎ 木造阿弥陀如来坐像
  - ◎ 木造薬師如来坐像
  - ◎ 木造薬師如来坐像
  - ◎ 木造日光・月光菩薩立像
  - 木造阿弥陀如来坐像
  - 木造大日如来坐像
  - 木造大日如来坐像
  - 木造釈迦如来及び両脇侍坐像
  - 木造釈迦如来及び両脇侍坐像
  - 木造梵天立像
  - 木造伝・光背化仏
- 岩手 中尊寺金色院  
茨城 西光寺  
岩手 中尊寺金剛院  
岩手 中尊寺瑠璃光院  
岩手 中尊寺  
岩手 中尊寺金色院  
岩手 中尊寺願成就院  
岩手 黒石寺  
宮城 観音寺  
岩手 中尊寺金色院  
岩手 中尊寺大長寿院  
岩手 中尊寺常任院  
岩手 中尊寺積尊院  
岩手 中尊寺薬樹王院  
岩手 中尊寺
- ◎ 国宝 ◎ 重要文化財 ○ 県指定文化財  
(菅原 光聰)

## 樹齢六五〇年杉の大木

菅野 康純

〔経緯〕  
平成十九年十一月十三日 天皇陛下が延暦寺に行幸された。

中尊寺貫首も陛下をお出迎えに延暦寺に登叡。その折に、延暦寺別院勝華寺住職小森恵師より、次のようなお話があった。平成十七年十一月から始まった重要文化財葛川明王院本堂ほか三棟保存修理事業（国庫補助事業）に伴い、その堂塔保存環境整備のため、今年（平成十九年）境内にある樹齢推定約六〇〇年の杉の大木を数本伐採することになった経緯と、その対応について市場へ売却するよりいずれかの寺院にて使用していただきたい旨のお話であった。この老杉を中尊寺が譲り受けることになる始まりである。

貫首が帰山後、中尊寺では検討の上、翌月十二月四日に、葛川明王院へ執事長・金剛院・円乗院・章興の四名が出向

してその杉を実見させていただいた。

「木目の美ごとに詰んだ、材としてもこんな素晴らしいものを見たことがない。

おそらく余所では得られない杉である。

可能ならば中尊寺の堂塔に使用したいもの」との感想で一致した。中尊寺では

「ありがたく頂戴いたしたい」旨を明王院の方にお伝えした。

しかし、その運搬についてなかなか目処が立たない……。

一・二五mで、長さ六・三m、重量八トン。二番物で元口一・二五m、末口一・一mで、長さ六・二m、重量七トン。三番が元口一・一m、末口〇・九m、長さ四・六m、重量



六トン（重量はいずれも伐採時）である。製材して運ぼうにも製材の機械に掛からない程の大きさである。方策に悩んでいる内に年も明け、春を迎え、初夏の日差しが差し始めた頃、地元平泉の小岩材木店社長小岩敏郎氏から東京深川の「木挽き」さんの話を聞く。

板や柱など昔は原木から大きなノコギリ（大鋸）で挽きだされていた。そうした製材のための技能を持つ職人のことを「木挽」とよぶ。材木商が集っていた東京・深川の木場だけで、かつて三〇〇人はいたという木挽きだが、いま現役で働いているのは全国でも東京の林以一さんとそのお弟子さんの二人しかいない。

この話を聞き容れて手配を依頼。早急に運搬の日程等を打ち合わせることとなった。

### 〔搬入〕

八月一日小岩氏と康純が打合せに葛川明王院に向向。小森師と会い、現在解体修理中の本堂・庵室・不動堂（修理完了）・庫裏門等を案内していただく。滋賀県では最古の部類になる建築部材が発見され、復元されて平成二十二年

が平泉の小岩材木店に到着。

八時頃クレーンによって積み下ろし作業が始まる。最後に最大の材を下ろし終えた途端、クレーンが「パン」という爆音と共に煙に包まれた。実は油圧パイプが重さによる圧力に耐えかねて一部外れてしまったのである。その時点で重量は約七トン、幾分材が乾燥していたが重いのに変わりはない。荷を下ろした後だったので事無きを得たが、とんだハプニングであった。

小岩氏は架設の覆い屋で木の周りを囲み木挽きの林氏を迎える準備を整える。

九月十日午前中木挽き東京新木場林組の林以一氏とその弟子さんの二人が車で来町。

昼過ぎ、小岩氏の案内で中尊寺に來山。執事長他と挨拶。境内を拝観する。

### 〔作業〕

その後、林氏は小岩材木店特設作業場にて墨付け・鋸入れを行う。

執事長と現場で立会う。木を一目見て年輪を数えること

完成予定であるとの説明をいただいた。

さらに保存環境を整えるため本堂周囲の樹木を伐採し、低灌木に代える作業を行っていた。日差しが本堂に当たり、風通しも良く椽葺きの屋根には良さそうな感じである。

明王院と少し離れた所、車で三〜四分の通称 願海屋敷跡にその木はあった。あらためて直径・長さ等寸法を測る。内一本が三分割されて、他に径は小さくなるが立木二本分が置かれていた。小森師によると、大型建設機械はいずれも搬入出来ないため、送電線架線工（鳶職）の協力を得て伐採し、リフターを駆使して人力でここまで運んだとのこと。小森師が自ら指揮されたそうである。

引き続き搬出方法・運搬方法を打ち合わせる。街道（国道367号）の横の駐車場まで搬出・積み込みを小森師に行っていただけのことになり、平泉の小岩氏が車両の手配を行うことで話はまとまり、日程を後日連絡することにしてその場を辞した。

八月二十五日昼過ぎに葛川に手配した二五トン・トレーラーが受け取りに行くことになった。

八月二十七日朝七時頃、葛川の老杉を積んだトレーラー

もなく「樹齢六五〇年位でしょう」と云われる。室町時代

（南北朝）足利尊氏晩年の頃に植えられた杉であった。

この墨付け・鋸入れが重要で、元（根本側）・末（上側）で径が異なるのに中心を通す基準を設定する・その墨に合わせて鋸を入れる部分が一番気を使う作業なのだそうである。

大鋸が総て木に入ってしまうと上下に動かなく（動けなく）なる。角度はあまり心配をしなくて良いとのことである。

二人で左右から交互に大鋸を入れていく。木が大きいのでお互いの顔は見えない。しかしその音・様子をお互いに伺い、息のあった作業を淡々と急がず同じ



テンポで進めていく。見てみると、気の遠くなるような、ただ唯根気のいる仕事であることを実感。

切り口を見ると産毛があるような感触で綺麗である。機械製材だと毛羽<sup>けは</sup>だった感じの切り面であるが、大鋸は無理のない感じを与えてくれる。また巾一・六mで二人で左右から鋸を入れても段差が無い。……当たり前前なようだが感心してしまった。

予定では最低七日間、状況によってはもう少し掛かると聞いていたのだが、順調に作業は進んでゆく。林氏によると「杉の木は柔らかいので仕事が早くなる。堅い木では一日で数センチしか進まないこともある」そうである。

十五日に、お世話いただいた延暦寺勝華寺尊住小森秀恵師が来町。葛川で八月に打合せをしたときに、是非木挽きさんの仕事を見たいと云われており、忙しい中を平泉まで来られた。木の様子を自ら見て、さらに木挽き職人林氏に聞き、木が非常に良材であることに安堵されていた。

さらに林氏からは、次のような話も聴くことができた。「この木は雨風に晒<sup>さら</sup>して一年くらい置くと良い色が出る。一番良いのは水に漬けておくこと。渋が抜け、渴いたとき

に綺麗な良い色が出るし、乾燥も早い。」

「木の特性を見て生かすこと。これが現在の大工さんではなかなかできない。また、何に使うのか(柱・板等々)具体的に決まっていればその様な木取りもできる。この材は何にでも使える素性の良い木です」等々、ご教示いただいた。

十七日午前中で作業終了。

現在、この杉材は皮を削<sup>け</sup>ぎ、割れ防止剤を塗布し、雨ざらしにしてある。

縁あって担当となった私ですが、この杉の木は、何に使うのか。……頂戴した杉の木は天津の山奥の寺院で、足利義満、日野富子等の参籠を見、修行の道場を見て、多くの人々を見守ってきた「御神木」と受け止めたい。中尊寺としても、その刻まれた歴史と縁あって頂戴したことに思いを致し、一番相応しい使い方、材としての活かし方を考えていきたいものと思います。

(法務執事)

## 岩手宮城内陸地震の被害と風評について

三浦章興

はじめに、今回の地震で命を落とされた方々のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

平成二十年六月十四日午前八時四十三分頃、岩手県内陸南部を震源とした「岩手宮城内陸地震」が発生した。平泉町でも震度5の揺れを感じる程の大きな地震であった。

震源は、岩手県内陸南部(北緯三九度〇一・七分、東経一四〇度五二・八分)深さ八km規模はマグニチュード7・2、最大震度は、岩手県奥州市や宮城県栗原市などで6強を記録した。地震のメカニズムは、西北西―東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型といわれる。

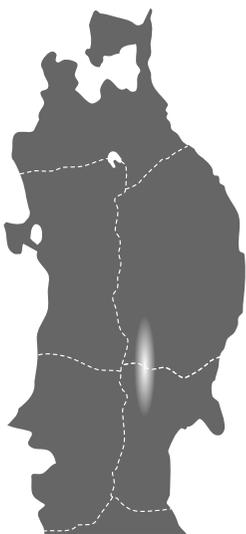
(6/14気象庁報道発表資料より)

各地に甚大な被害をもたらしたこの地震は、県内では須川岳に続く国道に架かっていた祭時(まつるべ)大橋が落橋するなど、震源地付近では特に酷い被害が発生した。

死者十三名。行方不明者十名。負傷者四五一名。建物全半壊一七二棟。火災四件。土砂災害四十八件。

(11/19内閣府発表資料より)

震源から約二十km離れたところにある中尊寺においては、挙げればいくつかの被害はあったが、文化財に対する損傷や参拝客への被害などが無かったことは、不幸中の幸



いであった。

被害といえば、参道山内各所の近世の石灯籠及び石塔の倒壊である。倒伏し、一部欠損した部分もあったが、数日後にはすべて元通りの姿に復した。

なお、一部の報道では重要文化財に指定されている「積尊院五輪塔」が破損したかのように伝えられているが、実際には被害と言うほどのものはなかった。

本堂の表門については、以前より筋交いで補強していた柱の部分に若干のずれが発生しており、さらに余震のおそれもあったために再補強が必要と判断し、建物全体のバランスを修整してからあらためて、より強固な筋交いを取り付けた。

建物の内部についても、本堂及び庫裡の壁の隅が所々に細かな剥離を生じた程度で済んだ。

平成十五年五月末に起こった地震に比べると、地震による被害は今回の方が遥かに少なかったように思われる。被害状況を調査する専門員が来山して現場を見ていったが、やはり以前の地震より損害は少ないと判断された。

ついて問い合わせの電話が入る状態である。

震源地付近の復旧作業についても進捗してきているが、報道によって生み出された風評被害の影響は、当分の間、元には戻らないだろうと思われる。

こうした報道風評に頭を悩ませているのは我々だけではない。

岩手県は、二度の地震に伴う観光宿泊キャンセルで、県内全体の経済損失が推計値で十二億二一〇〇万円に上ることを明らかにした。農商工連携や観光活性化に向け、部局横断的な組織体制づくりを検討する考えも示した。

(10/9 岩手日報)

昨年は、世界遺産登録を見送られるという残念なニュースがあり、次回の登録実現に向けて地域を挙げての取り組みが求められている。こうした風評が、その動きにブレーキとなってはならないだろう。

(管財部次長)

しかし、本当に大変なのはその後であった。

御存じのように、地震後しばらくの間は連日連夜のマスコミ報道によって、震災現場の生々しい惨状が、全国に向けて伝えられた。被害は甚大であり、また家に戻ることもままならない被災者のためにも、全国からの暖かい支援が求められていた。それを喚起する報道としては重要なものであっただろう。

しかし、平泉町内、中尊寺について言えば、先に述べたように参拝に支障が出るような状況ではなく、お客様に拝観をご遠慮いただくような必要はなかった。

にもかかわらず、震源地に近い有名観光地であり、また世界遺産登録が成るかどうかが注視されていた時期でもあり、倒れた石灯籠が新聞の号外やら雑誌などで大々的に取り上げられてしまった。

さらに、七月二十四日に岩手県沿岸北部で発生した「岩手北部地震」が、今回の地震と直接の関係が少ないにもかかわらず、あたかも大規模な余震であるかのように伝えられた。

あれから半年近く過ぎた現在でも、まだ、地震の影響に

## 東関部屋 あの高見盛関と「一緒に

〔二月三日〕

### 「大節分会」歳男 歳女

お申込み承ります

中尊寺の節分会には、歳男・歳女そして大相撲関取を迎え、近隣からも大勢の人が参集し、おかげさまで毎年境内がとても賑やかです。

ことに、中尊寺伝承の『魔滅大師』（まめだいし）は、七難を払う護符であり、「雨過天晴」苦難を乗り越切る心意気を示すものと好評です。

節分の護摩祈禱を申し込んで元気をいただき、魔滅大師を各家の玄関・戸口に貼って吉祥の印とされますようご案内申し上げます。

- ・厄年（数え） 男二十五歳・四十二歳（大厄）・四十九歳・六十二歳
- 女十九歳・三十三歳（大厄）・三十七歳
- ・還暦（数え） 六十一歳（昭和二十四年生まれ）
- ・当たり年 丑年生まれ

詳細は、中尊寺事務局 法務部 までご連絡ください。

☎〇一九一―四六一―二二二―一

富岡八幡例大祭―水掛神輿渡御特別参加を振り返る―



〈平泉神輿会有志の皆様〉  
 会長 千葉 智通  
 若頭 里美 尚一  
 幹事長 荻山 義浩  
 常任幹事 佐藤 長伸  
 平泉神輿奉賛会会長  
 千葉 庄悦

平成二十年。十年目の節目の年を迎えた水掛神輿は、東京深川で行われる富岡八幡例大祭水掛神輿渡御への参加を果たしました。この例大祭において、余処の神輿の参加が認められたのは、三百年の歴史の中で、この平泉神輿会が初めてのことです。本日は、その例大祭で実際に神輿を担がれた平泉神輿会有志、という

より勇士の方々をお招きいたしました。東京での神輿渡御に参加された感想、そしてこれからの平泉神輿への想いを熱く語っていただきました。



司会…平泉水掛神輿が開催されるようになりまして十年。

まずは皆様おめでとうございます。少々話はさかのぼりまして、この平泉という町で水掛神輿を始めることになりましたいきさつなどをお聞かせ願えますでしょうか。

庄悦…平成七年に、清衡公による平泉開府九〇〇年の節目の年で、町の記念催事に富岡の水掛神輿の方々に来てもらいました。その時にはじめて水掛神輿というもの、間近に見たわけです。その時、水掛神輿の

迫力といえますか、今まで自分たちが担いできた神輿とのあまりの違いに衝撃を受けたんですね。  
 そうしたら、仲間内でもそういうことを感じた者が何人か居まして、だんだんと「平泉でも水掛神輿をやりたい」という声が大きくなり、平泉神輿会の結成につながったんです。自分たちが見た富岡の水掛神輿の皆さんに指導を受けながら、神輿の稽古をして、今日のような形になったわけです。  
 司会…衝撃というのは、やはり大きなものだったのですか。実際担がれてみて、それまでの神輿と比べてどのような所に違いが。  
 長伸…それまでは、担ぎ手が自分たちの担ぎたいように担いで、町内・道筋の皆さんはそれを見るだけでしたから、一方的なところがありました。でも、今担いでいる水掛神輿は、水をかけることにより観客も参加できますから、そこに双方向性があるって一体感が生まれますよね。

始まった頃は町民の方々に文章を配って「水掛神輿がありますから、水を用意しておいてください、

神輿が通ったら掛けてください」といったことを宣伝して水を掛けてもらっていったんですが、十年経った今は、こちらから何も言わなくても皆さん水を用意してきてくれますね。水を掛けるのも最初は



恐る恐るだったのですが、最近は積極的に掛けてくれるようになりました。町民一体となってこの水掛神輿を楽しんでくれるようになった。

司会…そう、皆さん水を用意して、お神輿の到着を今か今かと待ちかねている様子でしたね。なかには、トラックの荷台いっぱいの水を用意している人も。

庄悦…最初は色々な声がありました。江戸文化の水掛神輿がこの平泉で根付くのは難しいとおっしゃる方も。第一、富岡の方にも最初は、「この月見坂を登って

金色堂までたどり着くのは無理」といわれた。それでも、皆で稽古をして一気に上る。達成感バツグンですよ。

司会…七年継続して「恒例」などと言ったりしますが、今年で十年ですからね、もはや平泉の夏の恒例行事と



4キロの道のりをへて金色堂にたどり着く

呼んでもおかしくない。そうやって定着した平泉水掛神輿ですが、この夏、三百年の歴史を誇る東京深川・富岡八幡例大祭の神輿渡御に余処の神輿としては初めて参加を認められた。まずは実際に参加されたご感想を。

庄悦…水掛神輿を始めた頃から、やはり心のどこかで「いつか深川に行って水掛神輿を担ぎたい」という思いはありました。けれど、その頃は夢のまた夢で。

義浩…練習の時など、富岡の人たちと話をするときなどは、自分たちが「いつか深川で担ぎたい」と思っている気持ちは話したりしていました。でも、まさかそれが現実になるとは。

智通…そうしたら、ある日招待状がとどきまして。

深川のお神輿の連合会長と幹事長の連名の招待状でした。我々、総会で話し合って参加することに決めるには決まったのですが、そこで一つ問題が発生したんですね。

長伸…平泉の水掛神輿は四キロの道のり、それに比べて深川は八キロの道のりがある。同じ人間が八キロ連続

で担ぎ続けるのは無理ですから交代をしながら担ぐんですけど、三交代すると考えて、一組八十名程度の担ぎ手が必要ですから、合計二四〇名、少し無理をするとしても、やはり二〇〇名は担ぎ手が必要になる。ところがあのとき、会員数は一五〇名。どうやって人を集めるかというのが、一番の課題でした。最終的には集まったんですけど、方々に声をかけて、やっと集めたんですね。

司会…それはそれは。

さて、当日の話ですが。

智通…当日の朝ですが、スタートラインまでお神輿を運ばなければならなかったのですが、これが遠くて、本番スタートの前に二キロぐらいお神輿を担ぎましたよ(笑)。

司会…本場深川での水掛神輿の道のりはいかがでしたか。

やはり、平泉で担ぐのとは大きな違いが。

長伸…スタートのときにはいつもより長い距離を担げるか不安がありましたね。

平泉の神輿は四キロの道のり。深川の神輿は倍の

八キロですが、この四キロの差というのは想像以上に大きかったです。どこまで行ってもまだ〜。それから深川の人たちは目がこえてるから。気が抜けないといえますか、自分たちの担ぎ方ができるのか不安でした。まわりの担ぎ手も普段より緊張しているように見えました。

尚一…平泉との違いで印象的だったのは、神輿を担いでいるとき、自分たちのワッショイの掛け声と拍子木の音が、ビルに反響するんです、それがとても印象的で、未だに耳からはなれないですよ。

長伸…沿道の皆さんの声援も、ビルにこだまして私たちの耳から心にとどくんですね。そんな声に励まされながら、仲間と声を掛け合って、午後、何時でしたか、ようやく終点が見えてくる。担いでへとへとになっている訳ですから、感動しました。でも、いざ終点が近くなってくるとなんだか、これで終わってしまうのが少し寂しくてね、手前で何度も何度も技を出したりしていました。

司会…このままずっと、神輿を担いでいたいなんて思われ

ましたか。

長伸…そんな感じです(笑)

庄悦…担ぎ終わって、しばらくはもの凄く大きな達成感でしたよ。皆もそうだったでしょ。

長伸…今でもなんだか、夢から覚めないと云うか、会員の中でも時々そのときの写真を見るとワッショイの掛け声が聞こえてくると言っている人もいます。(笑)

尚…岩手の田舎からお江戸の神輿に参加して、最初はまわりの人たちが受け入れてくれるかどうか不安でした。直前までそれは思っていましたね。でもいざ担ぎ始めてみたら、皆応援してくれるんですよ。沿道から地元深川の人たちの大きな声援が聞こえてきてね、「平泉だよ」「遠い所ご苦労さん」ってね。それがとてもうれしかったです。街中、みな本当に歓迎ムードでしたよ。

智通…次の日終わった後片付けをしていたら、僕たちの方に地元のお年寄りの方が来てくれて「ずっと深川の神輿を見てきたけど、あんなにきれいで気持ちのいい心に残る神輿は始めてみた。ありがとうございます

ならないと思います。

智通…町の方々も、そういったことを意識して、お神輿に参加していただければありがたいですね。

司会…十年目を迎えた平泉水掛神輿。これからも大事に郷土の若者へと伝承していけるといいですね。若い世代の人も沢山参加していましたね。



子供神輿

した」と声をかけてくれたんです。地元の人にそういってもらえたんですよ。すごく嬉しかったです。

長伸…我々は富岡の人たちに担ぎ方を教わるまでゼロ。水掛神輿なんて担いだことがありませんでしたから。まっ白な状態で、教わったとおりにしかできなかった。逆に言うと、だからこそ、基本に忠実な担ぎ方ができたのだとおもいます。それが、深川の人たちには新鮮に映ったのでしょう。

庄悦…伝統とか文化は、長い歴史の中で風化してしまうことありますよね。よく言えばこなれてくるともいえますが、他所のところでは、皆バラバラの半纏を着て、お酒を飲みながら神輿を担いで、自分たちが楽しければそれでいいという形になっているところもあるけど、やはりお神輿は神事ですから、精進といえますか、そういうものをどこか心の中に持っているかなければならないと思いますね。神様を担いで歩くわけですからね。遊び半分では絶対にだめです。形から入るわけですが、形ばかりでなく、そのような精神性も平泉神輿の後継者には伝えていかなければ

庄悦…そうですね、沿道にはまだ小学校にも上がっていないような子が水の入ったバケツを持って待っていてくれますし、小学生が担ぐ小神輿や中学生が担ぐ中

神輿というものもあります。彼らが大きくなって、また平泉に戻ってきたときには、きっと大人神輿を担いでくれるのではないかと思っておりますし、そうあってほしいと思いますね。平泉に生まれた子供が生涯をかけて楽しみ、大切に守っていける行事になつてくれると思います。

司会…町民の皆さんにメッセージはございますか。

庄悦…平泉水掛神輿は神輿会の会員だけではなく、町民の皆さんの積極的な参加に支えられて、十年を迎えました。夢であった深川の神輿にも参加することができました。これからも皆さんよろしくお願いいたします。

司会…最後に富岡の皆さんにも一言。

長伸…これからも平泉水掛神輿を末永くよろしく願います。

風信 / 語録

2008年夏、私はバイクで日本全国を一周する旅の道程で岩手県平泉の中尊寺を訪れさせて頂きました。

なにごん学生の貧乏旅行だったもので、旅を始めて以来、毎晩野宿で通っていたのですが、平泉を訪れたときは、ひよんなことから平泉十三区町内会の生ビール大会に参加させていただき、平泉の方々の優しさに非常に感激しました。その時の私は、一日に食パン三枚だけで過ごしていたものから、その生ビール大会のお酒とお食事は、まるで砂漠で見つけたオアシスのように、私の心と胃袋を満たしてくれました。

その生ビール大会で、中尊寺の佐々木邦世さんと出会い、翌日中

尊寺を訪れたとき、色々なお話を聞かせて頂きました。

日頃、僧侶の方とお話する機会など滅多にないので、ここぞとばかりに私からも様々な質問をさせて頂きましたが、未熟な私の質問にも快くお答え頂き、たいへん勉強になりました。

邦世さんのお話し振りはとても気さくで、中尊寺の成り立ち、聖徳太子の和の精神の話など、日常生活から歴史に至るまで多岐にわたり、また、わかりやすくお話ししていただいたことが、非常に心に残っております。

元々日本史の研究の為全国を回っていたので、私にとって中尊寺は興味深く、また楽しみにしておりました場所でしたが、日程上数

時間で発たなければならなかったことが本当に悔やまれます。

限られた時間の中、中尊寺を見学いたしました。私が圧倒されたのはやはり金色堂でした。内部の装飾もさることながら、ここに、奥州藤原氏四代公のご遺体が安置されていること。そして、今日まで、金色堂に携わるすべての人々の努力で、守られてきたこと。これは歴史的に見て非常に価値のあるものだと私は感じました。

世界史の常識ならば、金色堂のような前代の支配者の遺体が安置されている寺などは次代の支配者によって取り壊されてしまいがちです。ヨーロッパばかり、中国しかし、私の記憶にある限りは中尊寺のように建物・遺体ともに残って

いる例は他にありません。

私はこの事実、これこそ佐々木さんが仰っていた「和」の精神ではないかと思いました。勝利して尚敗者をいたわる心……。金色堂を通して日本史の世界、ひいては日本人の姿を見たような気がしました。

金色堂一つをとってもそれだけに私は色々と考えさせられ、またさらに興味を惹かれていきました。中尊寺を象徴する「浄土思想」につきましても、まだまだ研究しなければならぬ所がたくさんあり、残りの私の学生生活を費やしてもはたして足りるかどうかかわからない程です。

時間の都合上、中尊寺は一通り見て発たねばなりませんでしたの

で、一つ一つ事細かに見学し、研究することができませんでしたが、いつか必ずもう一度中尊寺を訪れ、ゆっくり時間をかけて見てみたいと思っています。もちろん、今度は野宿ではなく普通の旅行として(笑)。

今思い返してみれば、八月三十日に私が平泉を訪れなければ、生ビール大会に参加することもなく、佐々木さんのお話を聞かせていただくこともなく、一観光客として中尊寺を見学していたことでしょう。それを思うと、こうしてこの文章を書いている今も、自分の幸運、そしてご縁というものをしみじみと感じ、佐々木さんをはじめ、平泉の方々との思い出を振り返ると胸が一杯になる思い

です。たまたまフラリとやってきたしがない学生を温かく歓迎してくださり、平泉を周っている時も何かとお世話になりました。特に八百清の佐藤長伸さん、私の大先輩でもある衣関屋の千葉文泰さん、古都ひらひらみガイドの会の関宮治良さん、「関山」に文章を書く機会を下さった破石晋照さん、そして言うまでもなく中尊寺の佐々木邦世さん、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。また必ず平泉に参りますので、その時はよろしく願います!

## 風信 / 語録

(郵便受けから)

先日はありがとうございます。座禅をするのは初めてでしたが、皆さんの指導により集中してしっかり座禅をすることができました。また機会があれば座禅をしたいです。ご指導ありがとうございます。

北海道厚真町立厚南中学校 3年

上田 直倫

先日はお世話になり、ありがとうございます。中尊寺で見学した金色堂は、前に本で見えていたが、本物は本よりも輝いて見えると思えました。金色堂のことを質問したとき、色々答えてくださりありがとうございます。またもう一度いきたいです。

宮城県名取市立相互台小学校 6年

桜井 清亜

この間はありがとうございます。おちついてせいかつができるようになり、べんきょうもいつもどおりやっています。よしんが早くくなればいいなあと思います。夏休みがはじまるのでたのしみです。

岩手県一関市立本寺小学校 1年

佐々木 剛

中尊寺の敷地は思っていたよりも広く驚きました。平泉は京都を真似たのではなく、独自の文化なのだと思いました。大昔の人々が見ていた蓮の花を今も見ることができるとも夢があることだと思います。

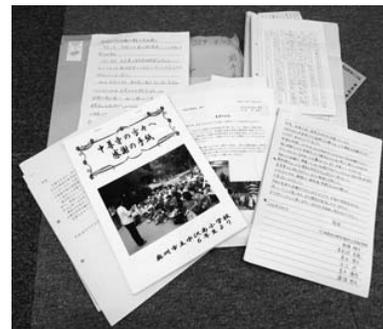
岩手県盛岡市立厨川中学校 2年

伊藤 早紀

私は、中尊寺で心に残ったことが三つあります。一つは、金色堂できれいに輝いていた仏像で、二つ目はきれいな中尊寺経、それから三つ目は本堂での座禅です。どうもありがとうございました。

岩手県田野畑村立田野畑小学校 6年

畠山 香奈子



## 不動尊（金色院蔵）の修理について



金色院所蔵の不動尊は、江戸時代前期の作で、三十年前現在の不動堂が建立されてからは、その本尊として祀られていました。今日では多くの信者さんをあつめ、一年を通して御祈祷が絶えません。しかし、経年劣化や損傷等が見られ修理することになりました。

両手・両足・指や台座・光背・火炎の組みなおしが主な修理で、仕上げは全体を古色仕上げとしました。今回、この修理に際し、差し首となっていた頭部をはずしたところ、中から胎内文書が発見されました。それによると、本像は貞享元年（一六八四）、天下泰平、仙台藩主伊達綱村公の武運長久を祈念し、時の中尊寺別当中興、大覚王院亮栄師の代に新調されたものであることがわかりました。

平成十九年十二月、京仏師坪田最明師に修理を依頼したこの不動尊は、翌年春、桜の咲き始めたこの関山にもどり、安置されていた不動堂に還座しました。

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

## 今年もいただきました

佐々木典子

今年度の活動で第一に挙げるのは、十月に郡山市・磐梯熱海温泉で開かれた「東日本奉詠舞大会」の舞踊の部で、前大会に続き、最優秀賞をいただいたことです。

大会は二日間にわたって開かれ、中尊寺・毛越寺支部は唱詠に『地藏菩薩和讃・地藏菩薩本願詠歌』を、詠舞に『夢和讃』を発表しました。

詠舞のメンバーの熱心さは、既に紹介しましたが、毎週の稽古の積み重ねが、大会で定評をいただいているものと思われました。

出場チームの中には、思い切り大きな声で気持ちよさそうにお唱えしているお年寄りや、揃いのユニフォームを脱ぐとジーンズにシャツ姿という若い女性もいて、ご詠歌会員の層が厚いことを感じました。

十一月には「一隅を照らす福祉大会」が、平泉で開かれ町内長島地区から、新しい会員が十名も参加しました。三月には、陸奥本部で初心者を対象にした研修会も計画され、今後ますます盛んになることが期待されます。

(円乗院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事)



亶山講福聚教会東日本奉詠舞大会にて

## 研究／出版

平成十九年一月～十二月

### 〔研究書〕

『蝦夷と東北戦争』戦争の日本史3

(吉川弘文館) 鈴木拓也

『平泉―自然美の浄土―』

(里文出版) 大矢邦宣

『絵図と景観が語る骨寺村の歴史』

(本の森) 吉田敏弘

『志波城・徳丹城跡』日本の遺跡31

(同成社) 西野 修

### 〔論文〕

「前九年合戦の断面―清原氏の参戦理由をめぐって―」

『杜都古代史論叢』樋口知志

「藤原清衡論(上)」

『アルテス・リベラレス』(岩手大学人文社会科学部紀要) 樋口知志

### 〔出版〕

『季刊東北学』特集「平泉、一万年の系譜のもとに」第16号

柏 書 房

「国際交易都市・平泉の歴史と文化―世界遺産記載延期の勧告をめぐり―」

入間田宣夫・熊谷公男・八重樫忠郎・赤坂憲雄

「蝦夷の系譜」

工藤雅樹

「奥羽古代・中世交易史―西と南を視野に入れて」

柳原敏昭

「平泉・宗教の系譜―仏教都市建設の底にあるもの」

誉田慶信

「救済と表象―「中尊寺供養願文」寺院に投影された意味について」

長岡龍作

「奥六郡から奥羽両国へ―平泉の政権の成り立ちをふりかえって」

入間田宣夫

「堀のある風景―柳之御所に至るまでの弥生時代からの系譜」  
「土器の系譜―中世的土器様式を準備したもの」

「柳之御所遺跡の建築」

「平泉藤原氏と中世武家政権論」

『平泉文化研究年報』第8号

岩手県教育委員会

「〔苑池都市〕平泉―浄土世界の具現化―」

前川佳代

「平泉の市街地形成―建物軸方向の特徴について―」  
「平泉文化と北方交易2―捺文期の銅碗をめぐる―」

磯野 綾  
関根 達人

「12世紀の二つの都市―平泉末期と鎌倉初期の遺物様相―」

鈴木弘太

『月刊文化財』特集「第32回世界遺産委員会」第541号

柳之御所遺跡調査事務所  
第一法規株式会社

「世界遺産と文化財保護」平泉の審査を振り返って」  
「世界遺産―一覧表記載再挑戦に向けて―」

大西 珠枝  
中村 英俊

「平泉―浄土思想を基調とする文化的景観」の評価・審査をめぐる」

本中 眞

『佛教藝術』特集「円仁と仏教美術」第300号

毎日新聞社  
有賀 祥隆

「円仁と仏教美術―総論にかえて―」

伊東 史朗

「立石寺入定窟の慈覚大師頭部について」

伊東 史朗

〔図録〕

『平泉』伝承の諸仏

中 尊 寺

「平泉」伝承の諸仏

浅井 和春



「西光寺薬師如来と奥州藤原氏」

黒澤 彰哉

「秘仏 一字金輪仏頂尊坐像」

佐々木 邦世

「金色堂諸仏の思想」

菅野 成寛

「もう一つの造塔造仏 金字宝塔曼荼羅」

破石 澄元

『平泉―みちのくの浄土―』

NHK仙台放送局・NHKプラネット東北

「平泉文化と「浄土」」

大矢 邦宣

「平泉仏教文化の諸相と特質―奥州藤原氏三代の仏事を中心として―」  
「平泉の浄土庭園」

有賀 祥隆  
田中 哲雄

「中尊寺創建伽藍における「一基の塔」と「中尊」」

長岡 龍作

「金剛峯寺蔵中尊寺経の調査のことども」 泉 武夫

『中世荘園骨寺村―奥州平泉中尊寺経蔵別当領―』

一関市博物館

〔発掘報告書・その他〕

岩手県文化財調査報告書第1225集

岩手県教育委員会

『柳之御所遺跡―第65次発掘調査概報―』

現代語訳『吾妻鏡』四・奥州合戦

吉川 弘文館



〈講演記録〉

平泉世界遺産盛岡フォーラム

——岩手から発信する世界平和の願い——

期日・平成二十年六月二十一日(土)

会場・岩手産業会館(サンビル)

基調講演

「中尊寺供養願文」を読む

中尊寺仏教文化研究所長

佐々木邦世 氏

パネルディスカッション

入間田 宣夫 氏 他



第十八回学術大会 佛教文化学会

テーマ・「宗教と地域」

期日・平成二十年十一月十五日(土)

会場・大正大学巣鴨校舎

研究発表会

市井の人維摩にみる社会貢献

大正大学総合佛教研究所研究生

西野 翠 氏 他

基調講演

自然地理から見た東北

大正大学教授 原 芳生 氏

草木塔に思う

千歳建設会長 千葉 栄 氏

〈宗風点描〉「奥大道を往く」

中尊寺仏教文化研究所長・大正大学講師 佐々木 邦世 氏

出羽三山 「開山伝承に見る神仏と景観のコスモロジー」

東北芸術工科大学院教授 内藤 正敏 氏

シンポジウム

「東北、祈りと

願いのコスモロジー」



〔関山句囊〕

〈第四十七回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

(平成二十年六月二十九日 於中尊寺)

(席 題)

花あやめ古都平泉母の郷

\*大串 章選

特選 紫 波 小野寺善三郎

月見坂登りて会ひし蓮の花

特選 滝 沢 遠藤 紀哉

(中尊寺賞首賞)

睡蓮の一輪しじま深くせり

特選 奥 州 佐々木秀子

(毛越寺賞首賞)

地震あとのみちのくに今青田風

特選 大船渡 及川由美子

白山の能舞台舞ふ揚羽蝶

秀逸 一 関 関野 吉美

声明の僧の頭の涼しかり

秀逸 青 森 吉村 哲子

複線の蟻の道あり毛越寺

秀逸 花 巻 市野川 隆

梅雨ぞらに杉まつすぐの光堂

秀逸 一 関 けんた 浪

竹林に掃きもどさるる竹落葉

\*小原啄葉選

特選 花 巻 菅野 トシ

須弥壇の供花に許さる梅雨の蝶

特選 石 巻 及川ひと江

梅干してここは大地震の震源地

特選 奥 州 及川 秀士

震度六揺れおさまりて蛙鳴く

秀逸 平 泉 関宮 治良

昨日より今日の高さや今年竹

秀逸 奥 州 鈴木 秀悦

金堂の闇に消へいる初堂

秀逸 一 関 佐藤 冬扇

関山や音の涼しき竹掃

秀逸 花 巻 菅野 トシ

青田なる浄土ひろがる平泉

(毛越寺賞)

\*佐治英子選 特選 一 関 佐藤 洋子

館跡のいのちを点す蛇莓

(平泉観光協会賞)

特選 奥州 鈴木 利和

神杉を抜けきし梅雨の蝶青し

(河北新報社賞)

特選 北上 伊藤 晴子

高館を一気に登る黒揚羽

秀逸 花巻 佐藤 豊子

道おしえたちまち殖ゆる光堂

秀逸 奥州 及川 秀士

古代蓮浄土の風に紅すこし

秀逸 花巻 後藤 冴子

平安の夢つぐ礎石麦の秋

秀逸 一 関 村上 達男

古代蓮見てゐる妻のゑくぼかな

(岩手県議会議長賞)

\*戸塚時不知選 特選 盛岡 草花 一泉

金色堂たどりし日傘たたみけり

(平泉観光協会賞)

特選 奥州 吉田 貞子

かたつむり世界遺産にかかわらず

(河北新報社賞)

特選 奥州 及川 英子

義経は北に逃がれし羽抜鶏

秀逸 川崎 太田 士男

御佛の五指ふくよかに梅雨の堂

秀逸 大崎 砂金 元子

裏谷に夏花つみけり中尊寺

秀逸 矢巾 荒川 匡

地震の後変わらぬままの梅雨の門

秀逸 盛岡 畠山 一美

かたつむり世界遺産にかかわらず

(平泉町教育賞)

\*工藤節朗選 特選 奥州 及川 英子

義経堂まだ未完なる蟻地獄

(平泉観光協会賞)

特選 盛岡 草花 一泉

竹林に掃きもどさるる竹落葉

(岩手日日新聞社賞)

特選 花巻 菅野 トシ

一望の青田となりし古戦場

秀逸 大崎 菅野志知郎

夏草の礎石に榮華しのびけり

秀逸 秋田 岩谷 塵外

梅雨のなか能楽殿は無音界

秀逸 一 関 阿部 哲雄

清衡の願ひ涼しく話されし

(平泉文化会議所理事長賞)

\*小林輝子選 特選 奥州 鈴木 正子

関山や音の涼しき竹掃

(平泉観光協会賞)

特選 花巻 菅野 トシ

西行も翁も風に大夏野

(岩手日日新聞社賞)

特選 一 関 伊藤 静枝

み仏の千手へ余震青嵐

秀逸 奥州 岩渕 正力

夏足袋の僧を吸ひ込む不動堂

秀逸 奥州 鈴木 利雄

もりあをがへる泡低く置く早梅雨

秀逸 花巻 鈴木 尚子

蓬長く柳の御所も伽羅御所も

秀逸 北上 伊藤ふみ子

覆堂を更に覆ひぬ青葉かな

秀逸 一 関 桂田 一穂

六月の能楽殿は無口なり

(平泉観光協会賞)

\*小菅白藤選 特選 奥州 熊谷 勅子

かたつむり世界遺産にかかわらず

(岩手日報社賞)

特選 奥州 及川 英子

世界遺産その後の沙汰の落し文

(岩手日日新聞社賞)

特選 一 関 佐藤喜佐子

芭蕉祭「静」出さうな能楽堂

秀逸 大崎 京極 久也

蚊を打ちてより芭蕉会のはじまりぬ

秀逸 宮古 菅野 啓子

目薬師の奥にねばりの枝蛙

秀逸 奥州 及川 忠子

(兼題)

はつらつと子供狂言こどもの日

\*大串 章選 (天) 一関 稻玉 宇平

櫻咲く国にながらへ下戸徹す

(地)室根 小山 武三

長命の家系の墓や著莪の花

(人)宮城 佐藤 實

墓五体投地の義経堂

\*小原啄葉選 (天) 青森 成瀬 桂子

浄土光あまねく享けて朴ひらく

(地)奥州 梅森 サタ

もののふの声のうぐひす中尊寺

(人)奥州 鈴木 利和

納屋に古る農具のあまた燕くる

\*佐治英子選 (天) 奥州 鈴木 正子

穴出し蟻たちまちに走り出す

(地)奥州 木村 文子

落花浴びつぎの落花へ歩を移す

(人)二戸 犬股百合子

竹皮を脱いで眩しき光堂

\*戸塚時不知選 (天) 花巻 中村 青路

戦いの跡かも知れぬ麦の秋

(地)一関 佐藤タカ子

五月雨に濡れて温顔磨崖仏

(人)一関 伊勢田あきを

水芭蕉合掌の手をひらきけり

\*工藤節朗選 (天) 宮城 砂金 元子

蛇行せる遣水に付つ白日傘

(地)北海道 森 葆子

山鳩の声も陽炎ふものなか

(人)大船渡 舟野 広

西行の讀へし山の初桜

\*小林輝子選 (天) 奥州 岩瀨 正力

ちちははのこゑの染みたる苗障子

(地)奥州 及川 忠子

黄水仙けふ午後の子が来るといふ

(人)宮城 道 千

啓蟄や石を動かす寺男

\*小菅白藤選 (天) 奥州 木村 文子

日傘より帽子の似合ふ中尊寺

(地)北九州 松本 隆吉

おだまきや牛車の登る月見坂

(人)平泉 旭 光

児童生徒

平泉小学校

新緑がきらきらうつるやり水に

\*小林輝子選 特選 四年 千葉 彩暉

ハスの葉にしずくがぼたりきれいな

特選 五年 菅原 苑華

長島小学校

なす畑いろんな形友の顔

特選 四年 佐々木 翔

トマトの実水をはじいて光つてる

特選 六年 千田 伸哉

夕焼けに染まる若葉がすきとおる

特選 六年 畠山 優香

なつのくもふわふわわりのりたいな

秀逸 一年 尾川 太陽

あさがおのふたばがでてきてうれしいな

秀逸 一年 三浦奈保子

あじさいが色をへんかんだのしいな

秀逸 二年 三浦 篤志

かたつむりあめの日さんぼたのしそ

秀逸 二年 菊地 真衣

バツタだね草の中からこんには

秀逸 二年 小埜寺翔太

平泉中学校

向日葵がかしげで夢見る夏の空

特選 三年 岩渕 希穂

かたつむりアスファルトの上散歩する

特選 二年 遠藤 悟

梅雨の時期土のにおいがなつかしい

特選 三年 千葉 美咲

いにしへの時の記憶をハスの花

秀逸 一年 菅原 拓弥

朝櫻宝石の如く露まとう

秀逸 一年 眞籠 勇哉

蜜のね小さい光大切に

秀逸 三年 岩渕 真実

更衣服も気持ちもリフレツシュ

秀逸 三年 千葉 彩香

あじさいの傘したたる虹の空

秀逸 三年 松木 瑞穂

『雪浄土』—平泉 三十四句より—

(八月発行/照井 翠句集)

一輪の一切経の梅白し

睡蓮やほうと口開く磨崖仏

秋の蟬滅びんとして盛んなり

秋雨やもの立ちてくる能舞台

行秋の礎石に笠の翁かな

しぐるるや金泥沈む塗の椀

雪浄土雀も仏なりしかな

『句集 その女』

(四月発行/齋藤その遺句集)

木の実落つ音の一つや義経堂

金棺の目に在り黄落とどまらず

かたつむり翁の句碑を一人旅

百幹の竹の風入れ清衡忌

火取虫修羅と舞ひ落つ能箒

秀衡忌紫衣百僧の菊の寺

『秋海棠』

(稲田宇平句集)

旅人の句碑に旅人竹の春

西行の森に眺望秋長ける

五月田に関山の影深く入る

なほ奥に一坊のあり遅桜

一門の興亡ここに雪浄土

関山の花に沈みし十八坊

千年の火いろ給はり薪能

光堂裏の棚田の初蛙

梧逸忌の人を拾ひて枯野バス

(梧逸忌第十二回全国俳句大会 梧逸賞)

秋微雨雄牛のやうな句碑を撫づ

『寒雷』一月号〈暖響〉 池田 義弘

秋雨打つや楸邨句碑に屈まれば

『寒雷』一月号〈暖響〉 銀林 晴生

悪路王アテルイの遠谷窟火の紅葉

『寒雷』一月号〈暖響〉 新渡戸流木

邯鄲碑うしろ真赤なうめもどき

『寒雷』一月号〈暖響〉 池本 光子

霧ごめの束稲山や挽歌の碑

『寒雷』一月号〈暖響〉 井浪 立葉

鬼もきて遊ぶや月の楸邨碑

『寒雷』一月号〈暖響〉 石崎多寿子

つゆけしや毘沙門窟の燭のいろ

『寒雷』一月号〈暖響〉 唐橋 秀子

しぐるるや挽歌となりし一つ岩

『寒雷』一月号〈暖響〉 川村 研治

束稲の山よりしぐれ挽歌の碑

『寒雷』一月号〈暖響〉 菊池ふね子

萩は実に邯鄲の句碑濡れてをり

『寒雷』一月号〈暖響〉 対馬智恵子

磨崖仏窟のあたりがしぐれをり

『寒雷』一月号〈暖響〉 堀部 嘉雄

冬日にしむ掣しかめつ面の磨崖仏

『寒雷』二月号〈暖響〉 池田 義弘

師の句碑の秋寂々と大きかり

『寒雷』三月号〈暖響〉 鳥海 高志

関山や釣瓶つるべ落しの鐘を撞く

『草笛』二月号 小野寺 亨

清衡の願文のこゑ遠ひぐらし

『草笛』八月号 大澤 保子

秀衡が跡は田野に麦の秋

『草笛』十月号 太田 土男

かなはざる日の中尊寺蓮咲けり

『草笛』十月号 高橋 清人

蛸ひぐらしの声せりあがる能舞台

『草笛』十月号 いづみ 桂

豆叩く判官館ほうかんだての登り口

紺菊や金字一切経まなうらに

『草笛』十二月号 下斗米八郎

束稲山は雲置くごとく山桜

『たばしね』四月号 旭 光

山菜さんしゅう莢のほのと明るき山家やまがかな

『たばしね』四月号 佐々木邦世

山吹ぎっしやや牛車の登る月見坂

『たばしね』五月号 旭 光

金鶏山道塞くすぎみる葛つるの蔓

『たばしね』八月号 岩渕 洋子

\* 贈られた俳誌や購読新聞から、私の目に入った平泉の句を拾って書き留めました。ただ、「光堂より雪解水」(有馬朗人)とか、「朱唇仏」(水原秋桜子)、また「白き大日」(馬場あき子)などと類想の句は除かせていただきました。(編者・邦世)

〔関山歌籠〕

(平成二十年四月二十九日)

〈第二十九回西行短歌大会入選歌〉

\*大島史洋選

ばあちゃんの話に主語が欠けると孫より今日も指摘がひとつ  
(中尊寺貫首賞)

花巻 三田 照子

母の住む老人ホームは磯近くきょうも海鳥そらに呼びあう  
(平泉町長賞)

角田 朝長 スミエ

ビニールも編み込まれぬし鳥の巣はまろく小さくてのひらに乗る  
(平泉観光協会長賞)

奥州 阿部 ヒサ

啄木忌に写経の筆をとりにけり啄木を必要とせし一人として  
角田 高橋美枝子

夢にても子を叱りたる激しさに自覚めて暫し吾を寂しむ  
一 関 岩淵 初代

車窓より雪山見えて胸に抱く夫の遺影に夕陽あたれり  
奥州 五嶋 恵子

繋がれて淋しからむと声かけし庭の小犬にそつぽ向かれぬ  
一 関 古山 すゑ

旗取りの大将となり遊びける友は限界の村に逝きたり  
盛岡 菊池 陽

パソコンで碁を打つ夫の一人ごと厨に聞きつつ大根さぎむ  
盛岡 須藤 秀子

海底よりあがれる海女ら火を囲むめぐり明るき水仙の花  
(岩手日报社賞)

花巻 鎌田 昌子

川沿いに白鳥数百うねり飛ぶ白布吹かれて行くさまにして  
(IBC岩手放送賞)

一 関 千葉 泰子

雪だるま春日に解けて消えたれば「家出したね」と教え子の言ふ  
(岩手日日新聞社賞)

一 関 畠山 喜一

佳作

パソコンにシドニーの子と交すレシピ我にばかりし新鮮さあり  
一 関 名須川万里世

男の孫の鬼遣ふ声祖父の臥す居間より透る「病気は外へ」  
平泉 晴山 京子

一 関地方短歌会「はなぶさ短歌会」

骨寺の青田眩しもまだ若き母と田植をせし日の蘇る  
かえ

中尊寺の墓にねむれる友しのび電車の窓より無沙汰を詫びぬ  
岩淵 初代

大泉が池のほとりに眉根あげ未来語りし友すでに亡し  
判官の果てし高館より見ゆる北上川はゆるやかに行く

小沢 玲子

ふくよかに微笑み存在す秀衡の蓮眼朱唇の秘仏を拝す  
中尊寺の鐘声一音夕映えの束稲山の尾根に銜す

佐藤 和実

中尊の白山神社に合格の給馬買ひし孫とお礼詣りす  
天に月奥羽山地に日は沈み能「羽衣」の舞台  
ととのふ

佐藤美恵子

涅槃像に似たる山とぞ眼に辿る裳裾のあたり  
櫻咲く見ゆ

白き肌匂ふが如く迫りくる大日如来の朱き唇

佐藤 道子

毛越寺の萩を愛でつつ巡り来て野点の席に秋  
の風聴く

破魔矢持ちつれ立つ和服の乙女子が笑ひつつ  
来る月見坂より

沼倉 郁子

木洩れ日は往き交ふ人を朱に染め月見坂より  
夕暮れとなる  
亡き夫が寄進の梵鐘撞く音色大泉が池の水に  
及べる

山岸 信子



〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

平成十九年十一月十五日～平成二十年十一月十六日

□ 平成二十年

三月八日午後一時

人権啓発講座

於中尊寺

「子どもの人権といじめ」

―子どもを取りまく環境問題と背景―

講師 一関人権擁護委員 佐藤捷雄師

山内(寺庭婦人会)二十四名・檀家二名参加

三月八日午後二時三十分

布教養成所研修会 於中尊寺

「比叡の山―戦後の人と風景―」

講師 福田徳郎師

山内(寺庭婦人会)二十四名・檀家二名参加

五月二十四日

布教師会総会研修会 於中尊寺

研修会 討議

「平成二十年天台宗布教方針について」

説明 陸奥教区布教師会長 獄内真興師

講評 中尊寺貫首 山田俊和師

山内より六名参加

六月二十三日～二十四日

天台宗保護司会民生児童委員会研修会・総会

於川越プリンスホテル

地藏院 佐々木秀圓出席

六月十八日～十九日

東北仏青総会(研修会) 於小牧温泉

「悉曇(梵字)の実修」

講師 濱田智純師 山内より六名参加

十月九日～十日

天台仏教青年中央研修会 於延暦寺会館

山内より利生院菅野宏紹参加

十月十六日

天台宗一斉托鉢 於満福寺

山内より十名参加

\*集まった浄財二十万四千三百六十円は平  
泉町社会福祉協議会に寄託した

十一月二日

陸奥教区法要

於笹峯寺

世界平和祈願護摩供法要

山内より三名参加

十一月十六日

一隅を照らす運動岩手福祉大会

於平泉町

世界平和祈願法要

講演 「慈しむ心 思いやる心」

中尊寺貫首 山田俊和師

清興 津軽三味線 渋谷幸平氏

法要出仕十六名 協力十三名

御詠歌三十八名参加

内 山内より十二名参加

収益金五十五万円 内四十万円を平泉町

社会福祉協議会へ寄託 十五万円を地球  
救援募金へ

□ 役職任免 (平成十九年十月一日)

一隅を照らす運動監事委嘱

大長寿院 菅原光中

(同年十月一日)

開宗千二百年慶讃大法会事務所所員委嘱

観音院 清水広元

瑠璃光院 菅野康純

円教院 千葉快俊

(同年十一月二十六日)

教区出版通信員委嘱

瑠璃光院 菅野康純

(平成二十年一月十六日)

天台宗教学振興事業団監事任命

大長寿院 菅原光中

(同年一月二十二日)

一隅を照らす運動顧問委嘱

中尊寺 山田俊和

(同年四月一日)

天台宗国際平和宗教協力協会理事委嘱

□ 住職任命  
大長寿院 菅原光中  
(同年十一月一日)

天台宗総合研究センター研究員委嘱

真珠院副住 菅野澄円

□ 遷化

仙岳院代表役員代務者 菅原光中

(平成十九年十月一日)

寶性寺兼務住職 佐々木仁秀

(平成二十年一月二十四日)

利生院住職 菅野宏紹

(同年四月十六日)

□ 教師補任 (平成二十年二月二十日)

権大僧正 利生院 菅野圓融

(同年四月二十一日)

大僧正 地藏院 佐々木秀圓

大僧正 真珠院 菅野澄順

権大僧正 中尊寺 山田俊和

□ 経歴行階履修  
(平成十九年十一月十一日)

得度履修 円教院法嗣 千葉晃雅

瑠璃光院法嗣 菅野靖純

瑠璃光院法嗣 菅野裕康

(平成二十年九月五日)

四度加行履修 観音院法嗣 清水秀法

(同年十月二十三日)

天台会講経論義一之問勤仕畢 大長寿院 菅原光中

□ 遷化 (平成二十年二月十日)

利生院 菅野圓融 (七十七才)

(平成二十年十一月十日)

大徳院 佐々木慎有 (六十一才)

御神事能番組 五月四日

古美式三番

開口 三浦章興  
 祝詞 千葉快俊  
 若女 菅野澄円  
 老女 菅原光聰  
 大鼓 破石晋照  
 小鼓 佐々木律秀  
 笛 佐々木五大  
 後見 菅野宏紹

狂言

しびり 太郎冠者 佐々木亮  
 主 菅野澄円

能  
竹生島

天女 佐々木五大  
 ツレ 佐々木律秀  
 シテ 佐々木邦世  
 ワキ 菅野成寛  
 ツレ 菅野康純  
 ツレ 佐々木秀厚  
 大鼓 菅野宏紹  
 小鼓 佐々木仁秀  
 笛 清水広元  
 間 破石晋照

秋の藤原まつり 中尊寺能 十一月三日

和泉流狂言小舞

花の袖 千葉 遵  
 柳の下 菅野裕康  
 若松 佐々木 亮  
 喜多流仕舞  
 杜若 かり 青木みさを  
 はながたみ  
 花筐 道行 千葉万美子  
 ほうかぞう  
 放下僧 小唄 小嶋喜久子

狂言

清水 主 破石澄元  
 太郎冠者 菅野澄円

能

枕慈童 シテ 佐々木五大  
 大鼓 三浦章興  
 小鼓 佐々木仁秀  
 ワキ 菅野康純  
 ツレ 菅野成寛  
 ワキ ツレ 菅原光聰  
 笛 佐々木秀厚



五月五日

古美式三番

開口 三浦章興  
 笛 佐々木五大  
 後見 佐々木律秀

狂言

盆山 盗人 千葉 遵  
 某 菅野裕康

能

西王母

ツレ 千葉晃雅  
 シテ 佐々木五大  
 ワキ 菅原光聰  
 ツレ 菅野康純  
 ツレ 佐々木秀厚  
 大鼓 三浦章興  
 小鼓 佐々木仁秀  
 笛 菅野澄円  
 間 破石澄元

# 執務日誌抄

平成十九年十二月一日

二十年十一月三十日

## 平成十九年

### ◇十二月

- 一日 月次大般若(本堂)  
遠藤公男氏町内自然観察(執事長・参務邦世・管財章典)。
- 平泉文化会議所主催「遠藤公男先生講演会」(於平泉郷土館)。
- 三 日 管財光聰、黒石寺へ出向(日光・月光菩薩像借受依頼)。
- 平泉町交通安全運動推進町民大会(管財章典 於役場)。
- 四寺廻廊事務局会議(執事

長法務康純(総務澄円 於仙倉)。

おもてなし観光セミナー「外国人旅行者への対応」(総務快俊 於郷土館)。

- 四 日 執事長・邦世・澄元・章典、本山へ出向(五日、於葛川明王院)。

五日 岩手県観光誘致説明会(総務広元 於仙台国際且)。

六 日 曹洞宗岩手宗務所様団参。

遠野市防火管理者協議会様

二十一名来山(管財章典案内)。

本坊境内施設整備検討委員会(渡辺設計事務所管財)。

七日 薬師会(讚衡蔵)。

文部科学地域文化功労千葉初夫

氏祝賀会(老役席 於日武蔵坊)。

九 日 北上川RCA主催フォーラム(貫首 於ヘリーノH)。

十日 県観光協会大阪旅行エーシ

ェント説明会(総務快俊出張

(十二日 於Hグランヴィア)。

十一日 仏文研所長邦世・管財光聰、常陸太田市へ出張(金砂郷薬師坐像借受出陳依頼 郷土資料館)。

十二日 文化財建造物保存技術協会武藤正幸氏来山(経蔵・旧覆堂保存修理の件 管財光聰)。

不動堂本尊抜魂法要(修理搬出のため)。

十四日 弥陀会(本堂)

世田谷美術館館長酒井忠康氏

来山(管財 応援)。

秋期一山会議(大広間)

十五日 盛岡青年会議所理事長白澤仁氏

他三名来山(貫首・総務 応援)。

十六日 お経を読む会(瑠璃光院)

十七日 白山会(本堂)

貫首・総務広元、東京出向

(NHK会長橋本元一氏表敬訪問)。

初詣警備会議(管財光聰・章典)。

十八日 讚衡蔵建物内外設備状況検

査(三衛設計舎・管財光聰)。

十九日 平泉観光協会主催「おもてなし

観光セミナー」講演会 JTB

B常務取締役清水慎一氏 総務快

俊・澄円 於役場)。

二十一日 関東自動車工業表敬訪問

(執事長)。

二十二日 骨寺村荘園米奉納(本堂)。

二十三日 一山協議会(広間)

二十四日 文殊会(経蔵)

二十六日 平泉観光推進実行委員会

(総務快俊・澄円)。

岩手大学副学長齋藤徳美氏来

山(仏文研邦世・総務)。

中尊寺通り街灯整備推進委

員会(総務快俊 於役場)。

二十八日 恒例御供餅つき

貫首、インタビュール(NHK

盛岡)。

二十九日 讚衡蔵運営委員会。

三十一日 午後三時 一山総礼

## 平成二十年

### ◇一月

一日 〇時 新年祈禱護摩供修行

七時 東山町(若水送り)着

九時半 正月祈禱護摩(本堂)

十時半 総礼

修正会 釈迦供(本堂)

結果、堂籠り(五日 開山堂

貫首、インタビュール(テレビ

岩手)。

二 日 九時半 正月祈禱護摩(本堂)

修正会 薬師供(峯薬師 讚衡蔵)

十六時 謡初め(広間)

三 日 九時半 正月祈禱護摩(本堂)

修正会 山王供(山王堂)

十一時 元三会 慈恵供(本堂)

岩手県知事逢増拓也氏来山(貫

首挨拶)。

四 日 修正会 薬師供(瑠璃光院薬師堂)

五日 修正会 文殊供(経蔵)

大般若会(利生院弁財天堂)

梵焼供(結果勤、開山堂)

六 日 修正会 釈迦供・月山供(釈迦堂

本日より寒修行(行者七名、町

内托鉢)。

七日 修正会 白山十一面供(本堂)

大般若会(本堂)

修正会 弥陀供(金色堂)

八 日 修正会 薬師供(旧開伽堂薬師、

讚衡蔵)一字金輪仏・千手観

音法楽

修正会結願

十三時半 恒例「金盃披き」

九 日 貫首、法話(岩手県警察学校学

生四十四名 本堂)。

十一日 文化財防火訓練事前打合せ

(管財部章典 於役場)。

IBC岩手放送取締役菅野秀樹

氏来山(執事長 応援)。

世界遺産もてなし研修会

(讚衡邦世・日武蔵坊)。

十四日 慈覚会(御影供 本堂)

お経を読む会(貫首)

- 十八日 文化財防火訓練打合せ(管財光聴・章興 於役場)。
- 十九日 山内円教院法事(本堂)
- 二十二日 成寛・康純、能ワキ方藤野師へご挨拶に上京。
- 国彩HIRAIZUMI情報発信事業委員会(総務澄円 於観光協会)。
- 立正佼成会盛岡支部様来山(貫首応接)。
- 二十三日 念法真教総長桶屋良祐師来山(貫首応接)。
- 二十五日 前浄法寺町長山本均氏・トツプツアー役員来山(執事長 応接)。
- 二十六日 文化財防火訓練「平泉文化遺産」イメージコンテツツ発表会(執事長・総務 快俊 於郷土館)。
- 二十八日 参務邦世、大阪・名古屋へ出張(二十九日、県主催おでんせ観光王国IN大阪&名古屋)講

- 三十日 平泉町世界遺産地域協議会(執事長 於役場)。
  - ユニバーサルデザイン(U D)会議(管財光聴 於役場)。
  - (社)平泉観光協会理事会(執事長 於平泉レスト)。
  - 三十一日 貫首、対談(町長・奥州市長・一関市長・毛越寺執事長 TV岩手)。
- ◇二月
- 一日 月次大般若(本堂)
  - 貫首、インタビュ(IBC 岩手放送)。
  - 松井建設会長松井角平氏来山。
  - 三日 恒例大節分会(関取朝赤龍招く。歳男歳女八十七名、町内園児)。
  - 四日 讚衡蔵運営委員会。
  - 五日 JR東日本企画局長近藤雄二氏来山(執事長・総務 応接)。
  - 世界遺産登録記念イベント検討委(総務快俊澄円 於役場)。

- 七日 「世界遺産」イベント打合せ(総務快俊、於NHK盛岡)。
- 岩銀友の会講演(邦世「平泉いまが大事」H武蔵坊)。
- 声明研修(九日)。
- 十日 山内利生院住職菅野円融大和尚遷化。
- 十一日 一関喜桜会発表会(参務邦世 於一関文化C)。
- 十三日 経蔵・旧覆堂修理現地説明会(管財光聴・章興)。
- 貫首、法話(浄土思想について)平泉町議会議員十六名 広間)。
- 十四日 登録記念イベント検討委
- 八日 布教養成所研修会(福田徳郎氏講演 大広間)。
- 九日 讚衡蔵運営委員会。
- 十一日 四寺廻廊事務局会議(法務康純・総務澄円 於仙台)。
- 菊まつり協賛会役員会(管財章興 広間)。
- 十三日 本坊施設整備検討委員会。
- 十四日 総務快俊、盛岡へ出張(県観光協会全員協議会 H東日本)。
- 平成十九年度平泉町文化財調査委員会(管財光聴 郷土館)。
- 平成十九年度平泉町内遺跡調査報告会(管財 於平泉郷土館)。
- 十六日 県商工観光主催岩手県地域限定通訳案内士資質向上研修三十三名拝観。
- 本坊施設整備検討委員会。
- 十七日 平泉町世界遺産推進基金運営委員会(執事長 於役場)。
- 十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂) お経を読む会(金剛院)



春期一山会議(大広間)

- 二十日 春彼岸会法要(法華三昧 本堂)  
総代・世話人会総会(執事長・法務康純他 H武蔵坊)。
- 二十二日 山内法泉院法事(本堂)  
立正佼成会盛岡支部様来山(貫首応接)。
- 二十四日 開山会(護摩供 開山堂)  
平泉観光推進実行委員会幹事会(総務快俊・澄巴)。  
源義経公東下り行列保存会総会(法務康純)。
- 二十五日 平泉町観光審議会(快俊)。
- 二十七日 県観光ボランティアガイド連絡協研修(邦世講話 於平泉レスト)。八十名。  
県教委生涯学習文化課長齋藤憲一郎氏来山(執事長 応接)。  
貫首、講話(東北地区信用金庫協会 於仙台紅陽グラウンドH)。
- 二十八日 貫首、武田双雲氏と対談

- (テレビ岩手)。  
芭蕉祭俳句大会委員会(参務邦世 於役場)。
- 三十一日 讚衡蔵運営委員会。

◇四月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 二日 本寺地区地域づくり推進協議会来山(大長寿院 応接)。  
平泉観光協会理事会(執事長 協会)。
- 四日 JR仙台支店営業部長太田稔氏来山(執事長 総務 応接)。  
県教委生涯学習文化課総括課長大月光康氏新任挨拶に来山(執事長 応接)。
- 五日 天台宗陸奥仏教青年会托鉢(境内)。陸奥仏青総会(広間)。
- 八日 仏生会(本堂)  
お経を読む会(利生院)
- 九日 貫首、東北楽天ゴールデンイーグルス球団アドバイザーマーテ

- イー・キーナート氏と対談(テレビ岩手)。  
藤原まつり「源義経公東下り行列」主要役者記者発表(総務広元 役場)。
- 十日 貫首インタビュー(FM岩手) 神事能申合せ(大広間)
- 十一日 東北六県商工会議所連合会十名来山(邦世講話)。  
陸奥教区寺院婦人会岩手支部総会(総務広元 於毛越寺)。  
平泉町世界遺産推進協議会役員会(執事長 於役場)。
- 十四日 管財光聴、仙台出張(特別展「平泉 企画検討委・NHK仙台」)
- 十五日 NHK仙台佐藤健一氏来山(執事長 総務 管財光聴 応接)。  
菊まつり協賛会総会(執事長 管財光聴・章典 広間)。
- 十六日 不動堂本尊還座・開眼法要。  
貫首・執事長、盛岡へ出向(立正佼成会盛岡教会長大島氏他と

- の懇談会 毛越寺執事長同行)。  
古都平泉ガイドの会総会(総務快俊)。
- 十七日 総務部澄巴、東京出張(JTB カルチャースロン打合せ)  
東北歴博政次浩氏来山(宋版一切経他借受 管財光聴)。  
貫首・参務邦世、東京へ出向(浄土論「研修打合せ 多田孝文先生他 於大正大学)。  
藤原まつり警備会議(法務康純・管財章典)。
- 十九日 北上川RCA主催「北上川さくら植樹」(管財章典・職員蜂谷 於一関あいぽーと)。  
陸奥寺院婦人総会(大広間)。  
貫首、法話(平泉国際交流協会主催「岩大留学生の平泉探訪・交流」 二十一名 本堂)。
- 二十日 一関俳句協会総会(参務邦世 於一関文化C)。  
恒例花まつり

- 桜友会清掃奉仕(北坂)。  
紫波町観光協会三十名来山(管財章典案内)。  
岩手県南振興局長勝部修氏他来山(貫首・総務 応接)。  
讚衡蔵運営委員会。  
ウォーキングフェスタ平泉運営委員会(総務快俊 於役場) 神事能申合せ(能舞台)
- 二十四日 互助会総会(広間)。  
世界遺産推進協議会研修会(邦世講演 町役場)
- 二十五日 仏文研邦世講話(照井土地改良区 厳美)
- 二十六日 外国人観光客緊急通訳支援連絡協議会(総務快俊 於役場) 本堂札所設計会議(管財・法務・事業部)。  
貫首、京都へ出向(曼殊院門跡晋山式)。  
弁慶力餅保存会総会(法務秀厚)。

- 二十七日 本堂札所設計会議(渡辺設計事務所 管財)。  
二十九日 第二十九回「西行祭短歌大会」講師大島史洋氏「西行と現代短歌」
- ◇五月
- 一日 春の藤原まつり開幕  
藤原四代公追善法要、稚児行列常の如し。  
貫首、インタビュー(IBC 岩手放送)。  
郷土芸能奉演(達谷子供神楽)
- 二日 開山護摩供(開山堂)  
平泉祭礼古囃・後三年合戦絵詞修理完了披見(讚衡蔵)。  
酒田三十六人衆代参来山(貫首・執事長 総務、応接)。  
郷土芸能奉演(市野々神楽、赤伏神楽)。
- 三日 源義経公東下り行列レセプション(参務邦世・総務広元)。  
源義経公東下り行列(義経公

- 八 日 貫首、撮影(テレビ岩手)。  
平泉祭礼古図・後三年合戦  
絵詞修理完了披見(讃衡感)。
- 六 日 山王講(山王堂)。
- 七 日 新潟県高等学校退職者の会  
(仏像研究会)二十名来山。  
宗務庁出版編集長横山和人氏  
来山(貫首応接)。  
一関修紅高校生(三三〇名)、  
境内ゴミ拾い奉仕と法話聴  
講(本堂)。
- 五 日 開口・狂言「盆山」  
神事能「西王母」  
藤原まつり警備反省会。  
弁慶力餅反省会(法務秀厚)。
- 四 日 古美式三番  
狂言「しびり」  
神事能「竹生島」  
郷土芸能奉演(行山流都鳥鹿  
踊、林ノ木沢念仏剣舞)。

- 九 日 仏文研邦世盛岡講演(岩手県旅  
館ホテル同業組合五十周年二〇〇  
名ニューウイング)。
- 十 日 岩手セイコー社小野寺強氏・全  
龍福氏来山(総務・管財 応接)。  
十二日 秀圓・仏文研邦世・澄元・成  
寛、管財光聴、高蔵寺・弥  
勒寺参観。  
四寺廻廊総会(執事長・総務広  
元 法務康純・澄元 於松島)。
- 十三日 奥州市商工観光部長齋藤隆治氏  
来山(総務広元 快俊 応接)。  
平泉観光推進幹事会(総務快  
俊・澄元 役場)。
- 十四日 県議会平泉世界遺産調査特  
別委員会四十五名現地視察  
(執事長挨拶)。
- 十五日 貫首、浜美枝氏と対談(テレ  
ビ岩手)。  
影山賢次氏来山(平泉懐古図修

- 理の件 管財光聴)。  
平泉観光協会理事会(執事長  
於観光協会)。
- 十六日 立正佼成会盛岡支部長来山  
(貫首応接)。  
泉観光協会様三十名来山。  
貫首、講話(岩手県観光協会総  
会 H武蔵坊)。  
平泉商工会青年部総会(総務  
快俊 商工会館)。  
東山歴史文化振興会法話  
(邦世 本堂)。
- 十七日 仙台青葉能(貫首 於東北電力  
ホール)。  
マレーシア特命全權大使堀江政  
彦夫妻・大韓民国特命全權大使  
寺田輝介夫妻来山(執事長)。  
ウエーサカ仏教会総会(法務  
秀厚)。
- 十八日 お経を読む会(地藏院後住秀厚)
- 十九日 文化庁技官清水洋平氏来山(二十日、管財光聴)。

- 二十一日 平泉観光協会総会(執事長・総  
務快俊・澄元 商工会館)。
- 二十二日 ミシュラン社フイリップ・セ  
ルリエ氏来山(執事長 茶室)。  
二十三日 平泉商工会総会(総務広元 於  
商工会館)。
- 二十四日 陸奥教区布教師会総会(本  
堂・大広間)。
- 二十五日 本寺荘園田植式(大長寿院 於  
本寺)。  
駐日オーストリア大使ニッタ・  
シユテフアン・バストル氏  
来山(貫首案内)。
- 二十六日 平泉観光推進実行委員会  
(総務快俊・澄元 於役場)。  
いわて観光キャンペーン会  
議(総務快俊 H大観)。
- 二十七日 県観光協会様三十八名来山。  
YOKOSO JAPAN中  
国旅行会社他十名来山。  
平泉菊花会総会(管財章興)。  
平泉銀字経金分析調査(三十

- 日、東京理科大学中井泉氏)。  
広島県奥田元宋・小由女美術館長  
村上勇氏来山(管財光聴)。  
一関商工会議所記念講演  
(邦世・浄土とは景観とは「ダイヤ  
モンドH)。
- 三十日 平泉観光推進実行委員会総  
会(執事長 於役場)。  
県教世界遺産担当中村英俊氏  
来山(執事長 応接)。
- 三十一日 佼成ウインドオーケストラ  
盛岡公演(貫首 於盛岡市民文  
化ホール)。  
陸奥教区第二部檀信徒会総  
会(教区所長光中・社会庶務広元ほ  
か 於H武蔵坊)。  
日本人間関係学会講演(邦世  
「歴史的景観・文化的景観」於一関  
あいばーと)。
- ◇六月  
一日 月次大般若(本堂)

- JAL盛岡支店長小谷学氏他  
四名来山)。  
中尊寺仏青緊急托鉢(ミヤン  
マー・中国災害支援 境内)。
- 四 日 伝教会(御影供 本堂)  
一関警察官友の会総会(執事  
長 ベリーノH)。
- 六 日 貫首、岩手県知事達曾拓也氏  
と対談(テレビ岩手)。
- 七 日 貫首、講演(岩手大学)。  
陸奥教区檀信徒会総会(所長  
光中・社会広元 於仙台清浄光院)。



- 八 日 法華經一日頓写経会(本堂)
- 九 日 「平泉懐古園」搬出(防微保存修理 仙台・影山賢次氏)
- 十 日 職員研修(映画「御遺体調査」・「金色堂解体修理」 大広間)。
- 十日 長島小五・六年生四十七名見学。
- 十一日 泉觀光推進協福岡県内旅行代理店「初夏のみちのく体験事業」担当者十五名来山。
- 花巻・遠野・平泉観光推進協説明会(総務快俊 H千秋閣)。
- 十一日 四寺廻廊法要打合せ(法務康純 総務澄円 瑞巖寺)。
- 平泉町世界遺産地域協議会(執事長 役場)。
- 十二日 平泉町民金色堂参拝打合せ会(総務快俊 商工会館)。
- 十三日 四寺廻廊法要(貫首 執事長 澄元 康純 澄円、於瑞巖寺)。
- 十四日 午前八時四十三分、平成二十年岩手・宮城内陸地震

- (震度六強・平泉震度五強)。
- 千田孝信前貫首を囲む会(山田貫首他 於泉橋施)。
- 十五日 能「道成寺」披露(佐々木多門師)
- 十六日 ウェーサ力式典(法務康純・普照 総代世話人 於花泉長禪寺)。
- 総務部快俊、盛岡出張(泉觀光教育旅行誘致致会)
- 十七日 貫首、黛まどか氏と対談(テレビ岩手)。
- 岩手県知事達増拓也氏地震被災視察に来山(他五名、貫首・執事長)。
- 十八日 栃木感心寺池田宗讓師他四十名五名団参 貫首挨拶)。
- 東北仏青総会(青森古牧温泉)。
- 盛岡ユネスコ協会記念講演(邦世・平泉を語るとき「日東日本」(参務邦世・総務広元 於役場) 宗務庁社会部長源田俊昭師・社会書記松岡順海師、地震見

- 舞いに来山。
- 二十日 自在房蓮光忌法要(本堂) 外務省広報文化交流部長山本忠通氏来山(執事長案内)。
- 磐井歴史文化講演会(弘文研 邦世講演・一関市川崎公民館)
- 二十一日 貫首、インタビュー(めんこいテレビ)。
- 「平泉世界遺産盛岡フオーラム」(基調講演邦世 於岩手産業会館)
- 二十三日 八戸工業大学月舘敏栄氏来山(地震被害調査 管財章典)。
- 東北歴史博物館政次浩氏来山(資料返納 借受 管財光聰)。
- 大阪市立大学宮野道雄氏来山(管財章典)。
- 二十四日 互助会役員会(応接) 社会を明るくする運動平泉町実施委員会(総務広元 役場) 臨濟宗慈恩寺様団参。
- 一山協議会(広間)

- 二十六日 新人職員に救急救命AED講習(管財章典 平泉消防分署二十七日)。
- NHKフレッネット広島永倉尚信氏来山(管財光聰)。
- 平泉水掛神輿警備会議(管財章典 商工会館)。
- 二十七日 (財)クリーン岩手事業団五十名来山(執事長挨拶)。
- 四寺廻廊連絡会議(総務澄円 於電通仙台支社)。
- 二十八日 千葉清氏瑞宝単光章叙勲祝賀会(管財章典 平泉レスト)。
- 二十九日 第四十七回平泉芭蕉祭全国俳句大会(講演・大串章氏「本歌取りのこと」 大広間)。
- 三十日 大正大学同窓会岩手県支部総会(貫首挨拶 大広間)。
- ◇七月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 岩手県文化財愛護協会五十

- 名拝観。
- 二 日 岩手宮城内陸地震物故者追悼会復旧祈願法要(本堂)。
- 国立科学博物館佐野貴司氏来山(三日、資料借受 管財光聰)。
- 三日 讚衡蔵運営委員会。
- 四 日 東京・大阪他通訳ガイドの会四十五名来山(管財光聰案内)。
- 仙台市主催旅行エージェント研修会様十九名来山。
- 五日 山内仏像調査(六日、文部科学省科学研究費補助金研究基礎研究調査 管財光聰 五大)。
- 水沢大安寺婦人会様三十名団参。
- 平泉レストハウス落成式(貫首 秀圓 光中・仁秀・邦世 康純)
- 七日 福聚教会舞踊研修会(八日 大広間)。
- 内閣府原子力委員会委員松田美夜子氏来山(管財章典)。
- 八 日 三部明光寺様二十一名団参。

- 北東北若手議員の会二十名 拝観(弘文研邦世講話 H武蔵坊)。
- 九 日 弘文研邦世、東京へ出張講演(北上市企業誘致説明会講演会 於東京帝国H)。
- 十日 不滅の法灯、修理搬出。
- 北東北三県合同教育旅行情報交換会(総務快俊 十一日、於日ニューオータニ札幌)。
- 東北都市監査委員会研修会(邦世講演 於ブラザイン水沢)
- 十一日 県南振興局長勝部修氏 町長高橋一男氏他来山(執事長 応接)。
- 弁慶力餅競技保存会研修会(法務秀厚)。
- 十二日 とぎめき世界遺産塾四十名 拝観(管財光聰案内)。
- 十三日 如法写経十種供養会(頓写法華経奉納式)。
- 十四日 本堂本尊還座準備(厨子移設)。
- 十五日 内村皓一撮影(一字金輪仏写

真)奉納(花巻市高橋幹子様同行  
執事長・総務 応接)。  
十六日 丈六阿弥陀如来坐像・千手  
観音拔魂法要(讃衡蔵)。  
平泉観光協会理事会(執事長  
於観光協会)。

文化庁文化財部長大西珠枝氏  
来山(世界遺産登録延期までの経  
緯説明。執事長他一山多数出席  
於広間)。

(夜間)丈六阿弥陀如来坐像本  
堂移動。

十七日 千手観音像移動(讃衡蔵)。  
丈六阿弥陀如来坐像本堂還  
座(十月二十八日)

本堂本尊・千手観音開眼法  
要(本堂・讃衡蔵)。

清衡公御月忌(胎曼供 本堂)。

十八日 貫首、インタビュー収録  
(比叡の光)。

十九日 一関市博物館小岩弘明氏来山  
(資料借受 管財光聴)。

深川富岡宮八幡宮神輿連合  
六和会四十六名来山。  
互助会役員会(応接)。

「平泉の文化遺産讃歌」(貫首  
参観 於観自在王院跡)。

二十日 平泉総社神輿渡御(貫首出席  
於観自在王院跡)。

二十一日 県商工観光部主催ASEAN  
記者五名来山(総務快俊)。

二十二日 県総合政策部長菊池秀一氏来  
山(執事長 応接)。

一山協議会(広間)

文化庁記念物調査官本中眞氏  
来山(世界遺産についての経過説  
明 広間)。

岩手銀行会長永野勝美氏旭  
日小綬章叙勲記念祝賀会  
(貫首出席 於盛岡グランドH)。

二十六日 平泉公民館歴史講座(講師  
長島時子氏 伝大池跡・かんさん亭)  
貫首、和賀多聞院出向(光中  
同行)。

JR平泉駅構内植樹(鉄道  
沿線からの森づくり)五大(職員)。

JR盛岡支社長中井雅彦氏他  
二名来山(総務 応接)。

紫波五郎沼・古代蓮まつり  
(秀圓・管財章輿)。

二十九日 貫首、法話(山形教区成就院大  
山信英師一行 本堂)。  
三十日 貯水槽清掃(管財部)。

◇八月

一日 月次大般若(本堂)

奥の細道サミット(二日、  
参務邦世、秋田県にかほ市)。

二日 桜友会境内清掃奉仕

四日 十五時半、(平和の鐘)打鐘。

五日 中国駐札幌総領事胡勝才氏来  
山(光中案内)。

六日 平泉バイパス全線開通を祝  
う会(執事長 於日武蔵坊)。  
衆議院議員島村宜伸氏来山貫  
首 茶室)。

大文字まつり警備会議(管財  
章輿)。

岩銀会長永野勝美氏旭日小  
綬章を祝う会(貫首 於ペリー  
ノH)。

七日 結衆、夏安居(十一日、開山堂)

八日 大文字まつり担当者会議  
(法務康純 於役場)。

十四日 第三十二回中尊寺新能



能「清経」(佐々木宗生師)  
狂言「膏葉煉」(野村万作師)  
能「舍利」(佐々木多門師)

県知事達増拓也氏新能観覧。  
十五日 町成人式(総務広元 於郷土館)  
ユネスコ「寺子屋運動」(募金  
活動・平和の鐘打鐘 本堂)。

十六日 第四十四回平泉大文字まつり  
活動・平和の鐘打鐘 本堂)。

十七日 東京深川富岡八幡例大祭神  
輿渡御 平泉神輿特別参加  
(中尊寺貫首 先達)。

十八日 貫首他、平泉神輿奉賛会代  
表、山崎孝明江東区長を表  
敬訪問。

二十日 毛越寺施餓鬼会(仁秀)。

一山協議会(広間)

二十一日 平泉観光推進委(総務快俊・澄  
巴)。

二十三日 施餓鬼会御逮夜(本堂)

二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)

二十五日 一関市博物館小岩弘明氏来山  
(資料返却 管財)。

二十六日 文部科学大臣政務官浮島とも子  
氏来山(執事長 茶室)。  
町上下水道協議会(管財章輿)。

東北歴博政次浩氏来山(資料還  
納 管財光聴)。

二十七日 管財光聴、宮城へ出張(高藏  
寺仏像撮影 川嶋印刷同行)。

貫首、講話(全国精神科特別部  
会 於ペリーノH)。

二十八日 東京国立博小林達朗氏来山(全  
塔曼茶羅一時還納 管財光聴)

二十九日 管財光聴、衣川へ出向(大矢  
邦宣氏同行 金蓋寺薬師如来拜観)。  
貫首、法話(吉野作造記念館様  
二十五名 かんさん亭)。

衣川河道工事土地境界立会  
(管財章輿 於後合祀)。

三十日 昭和女子大学武田昭子氏来山  
(参務邦世)。

デンマーク大使近藤誠一氏来  
山(貫首 執事長・参務邦世 茶室)。

ユネスコ運動岩手県大会(一  
関大会)講演会近藤誠一氏 参務邦  
世 総務広元・澄巴 ペリーノH)。

三十一日 総務広元、東京へ出張(ふる

さと平泉念。  
紫波陣ヶ岡蜂神社例大祭  
〔章興出向〕。  
東京銀座料理飲食業組合様  
四十名来山〔貫首挨拶〕。  
龍玉寺施餓鬼会〔澄元参席〕。

◇九月

- 一 日 月次大般若〔本堂〕  
瀬見亀割観音祭礼〔秀厚出向〕。  
二 日 平泉観光推進幹事会〔総務快俊・澄円 役場〕。  
小野寺弘之先生〔共立病院長〕をねぎらう会〔光中 於日武蔵坊〕。  
三 日 泰衡公御月忌〔金曼供 本堂〕  
最勝寺様二十名団参。  
JTB「日本の旬」キックオフミーティング〔総務澄円 於仙台国際センター〕。  
NHK仙台加藤史彦氏・仙台市博物館酒井昌一郎氏・丹

青社様来山〔管財光聰〕。  
四 日 総務澄円、東京へ出張〔岩手県観光・おでんせ〕観光王国いわて〕於日航東京〕。  
五 日 「平泉懐古図」還納〔仙台・影山賢次氏 管財光聰〕。  
文化審議会文化財分科委員他十名来山〔参務邦世案内〕。  
六 日 富岡八幡神輿会様二名来山〔貫首応接〕。  
平泉水かけ神輿東京渡御慰勞会〔貫首・参務邦世 平泉レスト〕

- 七 日 管財光聰、北上市出向〔立花毘沙門堂〕。  
八 日 伝大池跡発掘調査〔十一月四日、文化財センター〕。  
瑞巖寺中興開山雲居禪師三百五十年遠諱法要〔貫首列席 成蹊大学浅見和彦氏・学生十五名来山〔澄元案内〕〕。  
めんこいウォークIN平泉運営委員会〔総務快俊 役場〕。

本坊整備委員会〔渡辺設計事務所 所渡辺治氏 総務・管財 於応接〕。  
十日 深川木挽師林以一氏来山〔葛川材木木挽き作業開始〕。  
十一日 菊まつり役員会〔管財章興〕。  
十二日 篁岳山御本尊御開帳参拝〔澄元 於篁峯寺〕。  
臨濟宗妙心寺派様六十五名団参〔執事長挨拶〕。  
松岩寺様二十六名団参〔総務 広元案内〕。  
フタバ平泉本社様十二名来山〔執事長挨拶〕。

- 十三日 日詰五郎染業師神社例大祭〔秀圓・章興出向 於同神社〕。  
立正佼成会様六名来山〔貫首 応接〕。  
十四日 喜桜会連合会発表会〔十五日、於能舞台〕。  
町敬老会〔総務広元 於平中体育館〕。  
十五日 延暦寺小森秀惠師来山〔葛川材

木挽き祝祭〕

十七日

- 白符忌〔本堂〕  
讚衡蔵〕特別陳列 国宝金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅全十幀〔二十八日〕。  
埼玉教区第八部慈光寺様十八名団参〔澄元案内〕。  
浅草寺教化部小林俊広様来山〔十月二十四日団参の挨拶 執事長 応接〕。  
管財光聰、仙台へ出張〔十八日、NHK展打合せ 於NHK仙台〕。  
十八日 岩手大学シニア・カレッジ〔邦世講義・本堂一拝観〕  
十九日 赤堂稲荷例祭〔護摩供〕  
二十日 讚衡蔵運営委員会  
二十二日 国立科学博物館佐野貴司氏来山〔資料返却 管財光聰〕。  
二十三日 秋彼岸会法要〔本堂〕  
MOA美術館河野泰典氏来山〔資料貸出 管財光聰〕。

お経を読む会〔光聰〕

- 二十四日 立正佼成会会長庭野日鑽様他来山〔貫首案内〕。  
一隅理事会〔広間〕。  
二十五日 仏文研邦世花巻出向〔日本新聞協会労務同友会セミナー講師 於H千秋閣〕  
二十六日 奥州市長相原正明氏来山〔執事長 応接〕。  
新聞労務同友会一行来山〔参務邦世案内〕。  
北上歓喜院故高橋妙齋師密葬〔真珠院・大長寿院・積善院・地藏ノ秀厚・真珠ノ澄円出向〕。

- 二十七日 エヴァーグロストアーズ社長袁文英様他三名来山〔執事長挨拶〕。  
二十八日 須賀川市立博物館様三十名来山〔参務邦世法話〕。  
二十九日 台湾旅行エージェンツ招待旅行一行七名来山。  
三十日 宮城県宗教法人連絡協議会二十五名来山〔総務広元案内〕

◇十月

- 一日 月次大般若〔本堂〕  
平泉町社会福祉大会〔総務広元 於平泉郷土館〕。  
「浄土」についての学習会〔邦世・澄円・普照 於大正大学〕。  
二 日 慈眼会〔本堂〕  
本坊境内施設検討会議〔渡辺設計事務所 総務・管財 応接〕。  
三 日 林野庁東北森林管理局指導普及課長高倉利弘氏来山〔明年秋の植樹祭について、執事長・管財〕  
衣川右岸河道付替工事に伴う土地境界及び土地調書の確認〔管財章興 於二区公民館〕。  
河北新報社他十一新聞社論説主幹・委員長十五名来山〔参務邦世法話 本堂〕。  
岩手大学樋口知志氏来山〔後三年絵詞〕〔管財光聰〕。  
四 日 柳之御所遺跡第六十九次発掘調査現地説明会

- 「清衡公遷都行列」平泉到達式（総務広元 於観自在王院跡）。
- 六日 菊まつり役員会（管財章興 広間）。
- 七日 貫首、講話（一関地区法人会「浄土に生きる」ペリーノH）
- 八日 特別展「平泉」出陳資料搬出（日通美術 〓十日）。
- JTB 関森氏来山（十八日、ピアノコンサート打合せ 総務快俊・澄円 応接）。
- 宮城県片岡地区民生会二十名拝観。
- 九日 富士社会教育センター丸山正明氏他二名来山（法話の打合せ 総務快俊）
- 北上歓喜院故高橋妙齋師本葬（真珠院・大長寿院・積善院・瑠璃光院・澄円）。
- 十一日 故小野寺弘之先生告別式（光中参列 於H武蔵坊）。

- 管財光聴、気仙沼観音寺へ出向（阿弥陀如来坐像借受）。
- 紫波町・平泉町議会議員一行来山。
- 紫波町・平泉町議会議員交流会執事長・光中 於H武蔵坊。
- 二十一日 管財光聴、常陸太田市出張（西光寺薬師如来坐像借受）。
- 二十二日 讚衡蔵収蔵庫ガス燻蒸（〓十六日）。
- 澄円・晋照、東京へ出向（浄土「学習会」於大正大学）。
- 関東自動車工業十二名来山（総務広元案内）。
- 二十四日 テレビ朝日系列二十四社放送番組審議委員五十名拝観。FNN編成部長十六名拝観。東京浅草寺様四十七名団参（貫首挨拶）。
- 二十五日 平成二十年度『歴史の道ウォーキング』一行来山。
- 二十六日 NHKプラネット対馬悟氏来

- いわて希望塾開催（講演管財光聴 於岩手山青少年の家）。
- 十二日 骨寺村荘園稲刈り祭（貫首・大長寿院 於厳美町本寺地内）。
- 十四日 貫首、法話（桜友会様二十五名）。東北森林管理普及課長高倉利弘氏来山（執事長・管財章興）。
- 十五日 管財光聴、黒石寺へ出向（黒石寺日光・月光菩薩借受）。
- 兵庫教区貫相寺齊川文泰師一行三十六名団参（貫首挨拶）。
- 中尊寺杯争奪野球大会開会式（総務快俊 於商工会館）。
- 十六日 教区法要習礼（於満福寺）
- 全国一斉托鉢（於満福寺）
- 岩手県・平泉町主催岩手プレスツアー一行十名来山（執事長茶室）。
- 十七日 総務澄円、東京へ出張（JTBカルチャーサロン「歴史の中の平泉」 講師・八重樫忠雄 於新宿センタービル）。

- 山（管財光聴）。
- 二十七日 貫首、法話（一関商工会女性会五十名）。
- 文殊菩薩等拔魂修法（大長寿院 讚衡蔵輪番仁秀法務 讚衡蔵）
- 二十八日 讚衡蔵テーマ展「平泉」伝承の諸仏（常陸太田市西光寺薬師如来・奥州市黒石寺日光・月光菩薩他開眼法要（貫首・一山総出） 開幕（〓平成二十一年四月二十四日）。
- 秀衡公御月忌（金曼供 本堂）
- 福島教区金礼寺様二十三名団参。
- タイ国政府観光庁総裁ポーンシリ・マノハーン氏他十六名来山。
- 中尊寺跡第七十四次大池跡発掘調査現地説明会。
- 二十九日 NHKプラネット保科修也氏来山（新・日曜美術館「撮影打ち合わせ」管財光聴）。

- 修正会音声録音（NHK 広間）。
- 仏文研邦世、盛岡へ出張講演（平成二十年予防医学事業推進全国大会 市民文化ホール）。
- 中外日報社津村恵央氏来山執事長 応接。
- 立正佼成会盛岡ブロック長大島宏之氏他来山（貫首挨拶）。
- 衣川右岸河道付替用地説明会（管財章興 二区公民館）
- 十八日 管財光聴、衣川金竜寺へ出向（仏像撮影 川嶋印刷同行）。
- NHKプラネット来山（展覧会図録打合せ 管財光聴）。
- JTB「角聖子響楽の調べ」ピアノ演奏（本堂）。
- 能申合せ（能舞台）
- 十九日 常住院山王堂釈迦三尊借受（管財光聴 五七）。
- お経を読む会（法泉院後住章興）
- 二十日 菊まつり開闢法要

- 第二回まちづくり懇談会（総務快俊 於商工会館）。
- 三十日 教区法要習礼（指導仁秀 総務広元 於算筆寺）。
- 三十一日 丈六阿弥陀如来坐像他抜魂法要（貫首一山 本堂讚衡蔵）
- 丈六阿弥陀如来坐像、讚衡蔵へ遷座。
- 「不滅の法燈」燈籠修理成り設置（法務 本堂）。
- ◇十一月
- 一日 秋の藤原まつり開幕 藤原四代公追善法要、稚児行列常の如し。
- 丈六阿弥陀如来坐像・千手観音開眼法要（讚衡蔵）。
- 貫首、記者会見（讚衡蔵テーマ展「平泉」伝承の諸仏について）。
- 郷土芸能奉演（一関 市野々神楽／江刺 行山流角懸鹿躍）
- 二日 菊供養会（本堂）

- 郷土芸能奉演(胆沢 行山流都鳥鹿踊/達谷窟毘沙門神楽) 教区法要(所長他出向 箕峯寺)。
- 三日 中尊寺能「枕慈童」、狂言「清水」、謡・仕舞(関・平泉 喜校会奉納 能舞台) 郷土芸能奉演(衣川川西念佛剣舞)
- 四日 南総教区観明寺様七十名団 参(貫首挨拶)。
- 五日 千葉県正徳寺様二十二名団 (旧組高欄貸出 管財)。
- 六日 貫首、法話(栃木県佐野市役所・町会長広瀬様一行三十名)。
- 七日 真言宗豊山派管長晋山式(貫首 於奈良長谷寺)。
- 皓友会写真展「浄土・平泉写真展」(参務邦世観覧 於プラザおでつ)。
- 金色堂西北壇諸仏抜魂法要。



- 九日 韓国・平泉文化遺産関連旅行エージェンツ七名来山 (総務快俊)。
- 滋賀県立大学富島義幸氏来山 (光背残欠視察 管財光聴)。
- 十日 写経奉納十種供養会(本堂 貫首、法話(四寺廻廊 本堂) いてて観光おもてなしマイスター)認定研修五十四名拝観。 青山学院大学浅井和春氏来山 (讃衡蔵テーマ展監修 管財光聴)。
- 山内大徳院住職佐々木慎宥和尚遷化。

- 十一日 JR東北本線横断通路に関する説明会(管財章典 於二区公民館)。
- 境内巣箱掛け(遠藤公男氏指導 晋照・五大、東京へ出向 (浄土)学習 於大正大学)。
- 十二日 竜王戦渡辺竜王・羽生名人他十名来山(執事長挨拶 茶室)。
- 十四日 「特別展 平泉くみちのく浄土」開幕法要(貫首執事長、光中邦世、法務康純 於仙台市博物館)。
- 北海道開拓記念館様来山 (資料還納 管財五大)。
- 十五日 菊まつり表彰式(大広間)。
- 十六日 宮城藤田寺様四十四名団参。 一隅を照らす運動・岩手福祉大会(貫首法話、慈しむ心 思いやる心) 於平泉小学校体育館)。
- 津軽般若寺様十四名団参。 大徳院慎宥師葬儀(本堂)

十八日 人命救助表彰式(管財章典 於一関西消防署)。



- 貫首、京都へ出向(三井寺大祭挨拶)。
- 二十日 食品衛生責任者養成講習会 (事業律秀 於一関合同庁舎)。
- 中尊寺歩道橋撤去
- 二十一日 総務部澄円、東京へ出張(丁

- TBカルチャーサロン「物語の中のみちのく平泉」講師・浅見和彦氏 於新宿センタービル)。
- 平泉観光推進幹事会(総務快俊)
- 二十二日 高田高校野球部四十名来山 (二〇〇キロ・ボランティアアウォーク 総務広元挨拶)。
- 貫首、法話(東山歴史文化講座 於松川公民館)。
- 野村万作・萬斎狂言の会(澄円 於一関文化C)。
- 二十三日 えさし藤原の郷開園十五周年記念祝賀会(法務康純)
- 天台宗御速夜(結果勤 本堂)。
- 天台会厳修(御影供 一山総出仕 本堂)。
- 二十四日
- 二十五日 貫首、ハワイ別院三十五周年記念式典へ出向。
- 二十六日 「特別展平泉」観覧(澄元・成寛・澄照・宏紹・澄円 仙台市博)。
- 平泉商工会青年部四十周年・

- 女性部三十周年記念講演(邦世「平泉この大いなる道草」。
- 式典(執事長 於日武蔵坊)。
- 二十七日 平成二十一年天台宗布教師会東北・北海道地区協議会事務打合せ
- 二十八日 平泉菊花会菊まつり反省会 (管財章典)。
- 二十九日 本坊境内施設整備説明会 (三十日、渡辺設計事務所同席 広間)。
- 三十日 二区公民館建設二十周年記念祝賀会(執事長 於平泉レス ト)

御奉納者 御芳名

平成十九年十二月～平成二十年十一月

一、立焼香机一基

千葉県船橋市 平野行雄様・平野幸枝様



一、本堂の和幡二対

岩手県一関市 鈴木一郎様

一、同 一対

中尊寺大施餓鬼会



その他 宮城県仙台市 蒔苗勝義様・蒔苗とみ子様

浄財御奉納者 御芳名

平成十九年十二月～平成二十年十一月十五日

曹洞宗 岩手県宗務所様 五万円  
 両磐インダストリアルプラザ様 三万円  
 最勝寺様 東京 十六万円  
 (有)平泉観光写真真社様 五十万円  
 念法真教 総本山 金剛寺様 五万円  
 埼玉教区法儀研究会会長 塩入秀知様 五万円  
 常住寺様 群馬 十万円  
 (株)鶴屋百貨店様 十万円  
 佐藤 元様 四万五千元  
 浄土宗 岩手教区様 五万円  
 立正佼成会盛岡教会様 三万円  
 海鋒 守様 三万円  
 鈴木一郎様 百万円  
 東雲寺様 宮城 三万円  
 和堂先生を偲ぶ会 佐藤芙蓉様 二十万円  
 佐藤芙蓉様 十万円

立石寺様 山形 三万円  
 千田孝信様 五万円  
 平井小松様 五万円  
 感應寺様 栃木 三万円  
 テクノプラザ岩手様 三万円  
 島村宜伸様 三万円  
 銀座料理飲食業組合連合会様 三万円  
 吉野作造記念館様 三万円  
 臨済宗 金毛寺様 三万円  
 実光院様 京都 三万円  
 立正佼成会様 三十万円  
 浄土宗 岩手教区様 五万円  
 新聞労務同友会様 十五万円  
 一関地区法人会青年部様 六万円  
 平野行雄様 十一万円  
 西光寺様 東京 六万円  
 實相寺様 兵庫 十一万円  
 関東自動車工業(株)様 三万円  
 浅草寺無畏参拝団様 五万円

南総教区第七部檀信徒連合会様  
観明寺様 千葉

十万円  
三万円

不動尊篤信御奉納者 御芳名

平成十九年十二月～平成二十年十一月

浄財募金

新潟県中越沖地震義援金	十二万三千二十九円
新潟県災害対策本部へ	
ミャンマーサイクロン被害・中国四川大地震義援金	
一隅を照らす運動総本部へ	二十七万三千八百四円
地震見舞金	百十二万八千円

赤堂稻荷鳥居建立寄進 御芳名

平成二十年一月～十月

平泉町 旭光様

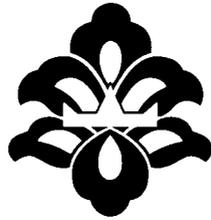
一基

佐藤恵一様	三万円
千田善鋼材様	三万円
一関市 割烹炬ばた一八	三万円
かわさき	三万円
ファミリークリニック様	三万円
(株)東北鉄興社様	三万円
山平様	三万円
田野崎チヨ子様	二万円
(株)精茶百年本舗	御供物
(株)豊隆軌道様	五万円
清水恒輝様	三万円
衡年茶千	五百個
川嶋印刷(株)様	十万円
平泉町 平泉中学校卒業祝様	十三万五千元
(有)ケーテック代表	十二万八千元
芦菅敬一様	三万円
一関信用金庫平泉支店	三万円
支店長 石川淳様	三万円
(有)千葉製材所	三万円
千葉芳美様	三万円
熱海 章様	三万円
宮城県 美里町 池田恵美子様	三万円
仙台市 仙台大原簿記公務員専門学校様	一万三千円
小島ヒデ子様	季毎御供物
栗原市 (有)金成工務店様	三万円

富良野市 南砂利工業(株)様	三万五千元
野村農園様	季毎御供物
小樽市 村口初男様	季毎御供物
青森市 唐牛正治様	季毎御供物
平川市 笠原山 不動院代表	四十四万七千八百円
弘前市 笹 隆治・哲子様	御供物・献酒
青森県 南部町 工藤一男様	季毎御供物
十和田市 慧光商事代表	三万円
秋田市 村上勝行様	三万円
大崎市 木村英夫様	五万二千元
大館市 ベル美容室 高橋紀美世様	季毎御供物
二戸市 加賀谷正子様	三万円
盛岡市 (有)岩食商事 米沢 励様	季毎御供物
釜石市 野口芳子様	三万五千元
奥州市 (有)水戸鋳金工業 水戸松男様	五万円
佐々木 久様	三万円

大崎市 伊藤紀明様	三万円
宮城県 日環エンジテリング株式会社様	三万円
富谷町 岸 久幸様	七万円
福島市 笹山まり子様	季毎御供物
いわき市 (有)佐久間庄送建設様	三万円
新潟市 松原晴樹様	季毎御供物
水戸市 藤枝恵枝子様	四万円
川越市 明王院寂照様	季毎御供物
中野区 中村武司様	三万円
新宿区 宇井政彦様	八万五千元
名古屋市 矢野建設株式会社交友会様	三万円
和泉市 辻林正博様	五万円





〈発行 中尊寺〉



〈発行 中尊寺〉